

教職員・学生のための広報紙

医歯大ひろば

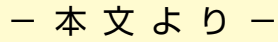
No. 84 平成13年 9月



留学生座談会



編集発行 東京医科歯科大学広報委員会



a Clinical and Histological Characteristics of the Study Patients

	Recovery Group	Non-Recovery Group	
Age (y)	58 ± 11	46 ± 15	N.S.
Sex (M/F)	7/7	16/12	N.S.
Serum Creatinine	4.3 ± 2.8	5.3 ± 2.8	N.S.
Blood Urea Nitrogen	56 ± 15 (mg/dL)	62 ± 18 (mg/dL)	N.S.

Patients with glomerular disease were excluded.

b Recovery Group

Case 1, S.T. 36F Case 2, H.A. 46M Case 3, Y.S. 25M

c Non-Recovery Group

Case 21, S.H. 49F Case 22, M.Y. 48M Case 23, U.N. 43M

d

Percentage of CD21 positive nuclei (%)

Group	n	Median (%)
Recovery Group	14	~45
Non-Recovery Group	27	~25

P=0.05

a) 急性腎不全患者41例のプロフィール
b,c) 腎機能回復群と非回復群の腎組織でのE2F1の発現。
d) 腎機能回復群と非回復群の腎組織でのE2F1の発現の統計学的検討。
腎機能の回復した14例においては有意にE2F1の発現が近位尿細管を中心に認められました。一方腎機能の回復しなかった27例においては、E2F1の発現は低下していた。(関連記事本文27ページ)

てらだよしお

医歯大ひろば

No.84 平成13年 9月

目 次

□留学生センターに望むこと	3
ー留学生座談会よりー	
□国際交流	15
レネ・フォックス博士を本学にお招きして	
□公開講座	19
教養部公開講座報告	
□教養部ってこんなところ	22
チンパンジーと怪物	
□シリーズ人間科学教育	23
□マイ・リサーチ	26
山上 皓教授, 寺田典生助手	
□海外レポート	29
黒岩俊彦助教授, 曾根田兼司助手 大学院生 林 栄治	
□学生ニュース	34
□健康コラム	47



■ 表紙の言葉 ■

6月21日(木) 留学生センター教官と留学生との座談会を実施しました。(関連記事 本文3ページ)

座談会

留学生センター設立1周年記念 特別企画

留学生センターに望むこと ―留学生座談会より―

日 時：2001年6月21日（木）10：30－12：30

場 所：留学生センター・ラウンジ

出席者：留学生センター教授 山下早代子

留学生センター教授 都河明子

季楠（中国・女性，医学部・保健衛生学科専攻生）

ダムロンルンルアン・ティーラサック（タイ・男性，医歯学総合研究科摂食機能制御学2年）

モーゼス・アカナム（ナイジェリア・男性，医歯学総合研究科行動制御学／材研2年）

ミレナ・アンジェロバ（ブルガリア・女性，医歯学総合研究科心肺統御・麻酔学1年）

アワード・シェリフ（エジプト・男性，医学系研究科環境皮膚免疫学4年）

―留学生センターの活動―

山下：本日はお集まりいただきありがとうございます。これから留学生センター教官と留学生の座談会を始めます。まず，留学生センターについて紹介したいと思います。

東京医科歯科大学には現在39ヶ国・1地域より208人の留学生が来日し，勉強・研究をしています。この内訳は，博士課程147人（短期留学生2人を含む。），学部学生24人，専攻生25人，日本語研修生12人となっています（部局別には表を参照）。

本センターは昨年4月に日本の国立大学における第32番目の留学生センターとして設置されました。主な業務の一つは，留学生に対する日本語教育の実施ですが，その中でも日本の医学，歯学系大学の拠点校として，東京医科歯科大学の他に医学部・歯学部を持つ大学へ入学を予定している留学生を迎え，医学専門用語も含めた半年間の日本語集中コースを提供していることは他のセンターにみられないユニークな点となっています。今年の4月には本学大学院に進学する予定の留学生の他に徳島大学，佐賀医科大学，山梨医科大学，横浜市立大学，高知医科大学，日本医科大学へ進学予定の留学生12名を研修生として受け入れました。

また，昨年1年間は初年度ではありましたが，留学生のために多くのイベントを実施しました。

例えば，手術見学，三島の協和醗酵研究所見学旅行，英語訳付きの日本映画ビデオ鑑賞，お茶の水祭での留学生とSSIA（国際交流に関心をもつ学生の会）学生による討論会『ここが変だよ医歯大生』開催，東京都主催の河川見学会・環境を考える隅田川下り参加等です。

本日は，留学生センター設立1周年にあたって，皆さんと一緒にセンターの役割も考えていけたらとこの座談会を企画しました。

都河：私は東京大学理学部から東京医科歯科大学留学生センター教授として，この4月に本学に来ました。専門は生化学，特に分子生物学ですが，長年留学生のお世話をしています。この留学生センターのもう一つの重要な役割として，来日した留学生の皆さんが東京医科歯科大学での勉強や研究に速やかに溶け込んでもらうよう，また異文化を経験し快適な日常生活を過ごせるようにいろいろな相談に対応することだと思います。私は月曜日，火曜日，木曜日の午後1時半から4時半の間，私の研究室をAdvising Officeとして開放しています。どうぞ問題や悩み事がありましたら遠慮せずにいらしてください。相談内容は全て秘密とします。

また，皆さんの役に立てるよう，入国管理局での在留期間延長申請書，再入国申請書，家族呼び寄せのための申請書等を用意してありますので必要な時に取りに来てください。

表：外国人留学生在籍者数

(平成13年 5 月 1 日現在)

区分 国・地域等	大 学 院 学 生				学部学生		専 攻 生				日本語研修生	計
	医歯学総合研究科	保健衛生学研究科	医学系研究科	歯 学 研究科	医学部	歯学部	医学部	歯学部	生体材料工学研究所	難治疾患研究所	留学生センター	
韓国	3		1	1						1		6
中国	37	2	16	7	3	1	8	2	1	3		80
モンゴル	1			1								2
台湾	2			4				1				7
フィリピン	1			1				1				3
インドネシア	1			1	1	1					1	5
ヴェトナム	1				1						2	4
ラオス	1			1								2
マレーシア					5	6						11
タイ	14		1	8	2			1			2	28
ミャンマー	2		2	2			1					7
ネパール	1		1		1							3
バングラデシュ	4		1									5
インド	1							1				2
スリランカ	1			3								4
イラン	1			1								2
シリア	1											1
ヨルダン	1											1
パレスチナ				1								1
エジプト			1				1					2
ナイジェリア	1											1
ガーナ	1											1
ギニア							1					1
コンゴ民主共和国									1			1
コスタリカ											1	1
ベネズエラ	1											1
ブラジル	4			4			1				1	10
アルゼンチン											1	1
ウルグアイ											1	1
パラグアイ								1				1
ペルー	1										1	2
コロンビア	1											1
ルーマニア					1							1
マケドニア				1								1
ブルガリア	1				1						1	3
ウクライナ	1											1
イギリス				1								1
フィジー					1							1
オーストラリア	1										1	2
小 計	85	2	23	37	16	8	12	7	2	4	12	208
合 計	147				24		25				12	208

一座談会



話題を提供する留学生センターの山下先生

ー東京医科歯科大学に留学した理由ー

山下：では座談会に入りましょう。最初に皆さん、自己紹介を兼ねて皆さんが東京医科歯科大学（TMDU）を選んだ理由をお話してください。

ティーラサック：私の卒業したチュラロンコン大学は東京医科歯科大学との国際交流協定校で、先生方との交流があり、先輩もたくさんいたので迷わず選びました（注：本大学ではタイの留学生数は中国に次いで第2位となっています。表参照）。また、タイでは東京医科歯科大学の歯学部は日本一と言われています。

季：東京医科歯科大学は有名で、指導教官を知っていたという理由と、TMDUの研究室の一教官が中国人なので安心していました。

モーゼス：ナイジェリアの指導教官と生体材料工学研究所の井上教授が共同研究をしていた関係で留学しました。ニューロサイエンス、特に睡眠の研究をしたいと思っていました。

ミレナ：ブルガリアでは集中治療室で麻酔科医として働いていました。指導教官からの紹介で日本に来ました。日本は安全ですし、ブルガリアではなかなか研究ができないので、科学の進んでいる日本で奨学金をもらって博士号を取るのは大変魅力でした。日本に来て、物価がとても高いのに驚きましたが、豊かな国なので医科

学も発展すると思います。

シェリフ：エジプトで皮膚科医をしていました。エジプトではなかなか研究ができないので、日本で博士号を取りたいと思い、日本大使館へ行き、文部科学省の奨学金を申請しました。合格しましたが、日本の研究者の情報を持っていなかったため、文部科学省が東京医科歯科大学を選んでくれました。結果的にこの大学に来てとても良かったと思っています。



日本語勉強中の季さん



ブルガリアでは麻酔科医のミレナさん

座談会

－研究内容について－

山下：ありがとうございました。では、次に皆さんが現在やっておられる研究について詳しく聞かせてくださいますか。

モーゼス：ナイジェリアでは薬剤師として薬理学の勉強をしていました。ナイジェリアでは睡眠導入法として薬草（Vervain plant）をお茶として飲むのが伝統的な処方となっています。この薬草について、科学的な研究をしたいと思っていました。今はラットやマウスなどの動物を用いて、睡眠のメカニズムを研究しています。東京医科歯科大学のニューロサイエンスの設備はすばらしいです。6月29日に日本の学会で発表し、9月にはシンガポールで開催される国際薬剤師会議でも発表します。

シェリフ：アトピー性皮膚炎の研究をしています。表皮表面のケラチン細胞のシグナル伝達機構を調べ、グルコステロイド薬剤の効果をみています。9月にはスウェーデンでの国際会議で発表します。また、博士論文をまとめており、順調に研究が進んでいます。博士号取得後はエジプトに帰国しますが、エジプトでは研究費がないため、研究を続けることができません。

ティエラサック：私は骨粗鬆症に対する薬の研究をしています。この病気は45歳以上の女性ではエストロゲンというホルモンが減少し、骨密度が低くなるため骨がスカスカになる病気です。治療薬としてエストロゲンを投与していますが、エストロゲンは骨だけでなく子宮等にも影響し副作用を起こします。そこで私の研究はエストロゲンにキャリアーを結合させ、直接骨に作用させて骨芽細胞を増やすというODDSというドラッグデリバリーシステムを考えました。現在良い結果が出ていますので、6月27日に千葉県幕張で開催される International Association for Dental Research という国際会議で発表します。

ミレナ：私は今までは母国で麻酔科医として働いており、東京医科歯科大では指導教官の槇田

睡眠のメカニズムを研究しているモーゼスさん



アトピー性皮膚炎の研究をしているシェリフさん

骨粗鬆症に対する薬の研究をしているティエラサックさん



教授のもとで人工呼吸治療法を勉強しています。1年生で始めたばかりです。

季：私は昨年10月に入学しました。専攻生で今度大学院の試験を受けます。まだ、研究をしていません。

一座談会

ー日本の大学と自分の国の医学・ 歯学教育の違いについてー

山下：皆さん様々な研究テーマに取り組んでいるわけですが、日本の大学で学んでみて、日本の大学と自分の国の医学・歯学教育の違いについて気付いたことはありますか。どのような違いがありますか？

シェリフ：エジプトの大学・病院は臨床のみで殆ど研究費がないため設備がありません。臨床をする上でも研究は必要だと思います。将来エジプトの大学に戻り、学生を育て東京医科歯科大学との交流をしていきたいと思っています。

ティーラサック：タイでも研究したいけれどお金がありません。日本の大学では基礎研究に力を入れていると思います。そのため日本で臨床医になるには研修が必要とされていますが、タイの大学では逆に臨床に力を入れているので、卒業してから研修の必要はなくすぐに臨床医となります。

ミレナ：日本では医学部を卒業したらレジデントとして、行き場所が決めるので自分の好きな所に行けません。しかし、ブルガリアでは自分で仕事を捜さなければなりません。どちらも良い点と悪い点があります。

モーゼス：ナイジェリアでは大学を卒業すると1年間レジデンスをしてから臨床医となります。その後も毎年試験があります。なお、ナイジェリアには PhD コースは余りありません。



ー日本の好きな点・嫌いな点ー

山下：では今度は大学や研究に関連した話題から離れて、皆さんが日本についてどんな点が好きか、あるいは日本に来て実際に生活してみて、こんな点が嫌だなあと感じたことがあったら話してください。

ティーラサック：日本の春と秋が好きです。タイは一年中暑いので四季がありません。また、嫌いな点は日本人の言い方があいまいなことです。タイフードフェスティバルに友人を誘ったのですが、「行くかもしれない」「ちょっと」と言われたので来ると思って待っていたら来なかったことがあります。また、「考えてみます」と言ったのに何も考えていなかったことがあり、とても残念でした。

山下：それは日本人独特の表現かもしれませんね。日本人はハッキリと断ると相手に失礼だと思い、少しソフトな言い方をするので。日本人同士だと「あ、断りたいのだなー」とわかるのですが、文化が違くと誤解が生じやすいですね。このような文化の違いも留学生センターの日本語コースで学び、日本人とのコミュニケーションをスムーズにはかる方法を学習します。

季：好きな点は交番や区役所などのサービスがとても良いことです。いやな点はまだ余りないのですが、電車の中で若い人たちがうるさい点です。

ミレナ：日本に来たばかりの時は、文化、俳句、きれいな洋服、生け花など全て大好きでした。

一座談会

しかし、だんだん日本滞在が長くなると悪い点ばかりが目立ってきます。例えば、男性が電車で座っていて、おなかの大きな女性に乗ってきても席をゆずらないなど、日本人は親切というのが本当は不親切なのではないかと思います。

モーゼス：私は日本の文化が好きです。テレビのドラマ、伝統、いろいろな施設など全て素晴らしいと思います。悪い点は日本人は自己中心的ではないかという点です。電車の中での事件が報道されていますが、他の人は無関心でいるからです。ナイジェリアの人は皆助けます。また、若い人が歩道でタバコを吸いながら歩いているのは気になります。

シェリフ：トイレがどこにでもあり、しかもきれいな点が気にいっています。また、電車がとても便利で、日本が安全だということです。おかしいと思うのは、教授と学生双方がまじめ過ぎるという点です。いつも話すのは研究についてだけです。

都河：数年前だと思いますが、慶応大学の岩男寿美子元教授が、日本とアメリカに留学している留学生各1000名に対しアンケートを取りました。その中に、勉学及び日常生活に満足しているかの満足度を縦軸に取り、滞在年数を横軸に取ったグラフがあります。

日本にいる留学生たちは、初年度は満足度が高いのですが、滞在年数が長くなるにつれて直線的に右下がりになり満足度が低くなっています。一方、アメリカにいる留学生たちは最初は満足度が低いのですが、滞在年数が長くなるに従って、日本の留学生とは対照的に右上りに上昇し満足度が高くなっていて、全く対照的な直線になっています。この説明として、日本での物価高や宿舎が足りないため、またアルバイトをしながらの生活と勉学の両立がなかなかうまくいかないことがあげられていますが、実はそれだけでなく、アメリカの留学生センターの役割が素晴らしいことも要因となっていると思います。アメリカでは数多くのアドバイザーたちが異文化を勉強した上で各国の留学生に適切なアドバイスをしたり、ボランティアに熱心なアメリカ人学生との交流プログラムを盛んに計画しています。

長い間鎖国をしていた島国の日本人にとっては、異文化を理解した上で外国人と接触することが不器用なのではと思います。日本の国際化を進める上で、留学生たちの存在は有意義であると思っています。



4月から留学生センター教授として留学生のサポート役の都河先生

一座談会

ー日本語についてー

山下：本学の留学生の指導教官の先生の中には、「研究をするために、あるいは国際会議で発表したり海外の専門誌に投稿するためには英語だけでできれば十分、日本語を勉強する必要はない。その時間があったら研究に回しなさい。」とおっしゃる先生がおられるようですが、皆さんが日本語を何のために、またどのように勉強しているか教えてください。

ティーラサック：来日前に100時間勉強しました。私は日本の社会の中では研究者とも日本語で話せるようにしたいと思います。自分の研究の上でも必ず役立つと思っています。

山下：ティーラサックさんは昨年日本語能力試験にチャレンジして見事に2級に合格しましたね。

シェリフ：実は文部科学省の奨学金のために日本大使館で申請した時、日本語を全然勉強していないと言ったら、英語ができればOKと言われました。実際に日本に来てみたら英語だけでは全然生活ができないことがわかりました。

モーゼス：私も日本大使館で英語でOKと言われました。しかし、来日後、銀行、郵便局などで日本語がわからず大変困りました。私には妻や子供もいるので日本語が本当に必要です。今はテレビなども見て日本語を理解できるように

しています。大学で日本人の友人をつくるためにも日本語は必要です。

ミレナ：私は来日前に勉強しませんでした。一番大切なことは日本語を学んだら日本人との関係がうまくいくということだと思います。

季：人間とは言葉で交流するものだと思います。ですから生活の面でも、研究の面でも日本語の習得は大事なことだと思っています。今、留学生センターで勉強している日本語がとても役立っています。

山下：留学生センターでは留学生の皆さんが積極的に日本の生活に溶け込めるよう、日本語だけでなく文化や習慣等も言葉と合わせて講義していますので、なるべく多くの留学生に参加していただきたいと思います。

ー留学生センターに望むことー

山下：東京医科歯科大学に留学生センターが出来て1年たちます。最後に皆さんがどんなことを留学生センターに期待しているか話してください。ご意見やご要望も参考にさせていただき、より良いセンターにしていきたいと思っています。

モーゼス：私はさっきも言ったように、今家族（妻・2歳の娘）と調布市に住んでいます。日本人とコンタクトを持てるような共同の宿舎に住みたいと思っています。



座談会

季：私は宿舎の情報をもっと提供してほしいと思います。

シェリフ：私は東京医科歯科大学に入学する前に千葉大学で半年間日本語集中コースを受けました。千葉大では日本人との交流会があり、今でも日本人の友人と会うことがありますが、東京医科歯科大学では日本人の友人がいません。日本人との交流の場を設けてほしいです。

都河：留学生センターでは、本大学の卒業生や文京区に依頼して、ホームステイ・ホームビジット制度や本学の日本人学生や地域の方々との交流会等を計画中です。これにより皆さんがより日本の文化に接することができると思っています。

ミレナ：色々な日本人とお酒を飲みに行きますが、これらの日本人は必ず外国に住んだことのある人たちばかりで、とても不思議です。

ティーラサック：東京医科歯科大学にはSSIA（国際交流に関心をもつ学生の会）があり、タイとの交換プログラムもあります。どんどんオープンに活動出来たら良いと思います。

山下：これからの留学生センターの業務として、日本人学生の海外留学のサポートも計画しています。海外生活を体験した日本人学生との交流プログラムを計画するのも良いですね。他に具体的な交流プログラムとして、何か希望していることがありますか？

ティーラサック：日本人学生との旅行を計画して欲しいです。

シェリフ：その他に日本人との交流として、スポーツやホームビジットを計画して欲しいと思います。

ミレナ：日本語を勉強したいと思うのですが、研究などで忙しいため、できたら土曜日に勉強できたら良いと思います。



山下：できることから少しずつ具体化させていきましょう。本日はお忙しい中集まっていただき有意義なご発言ありがとうございました。留学生センターは皆さんの要望に答えるよう、アクティブなセンターにしていきたいと思っています。ありがとうございました。



一座談会

ー留学生センター教官からのメッセージー

山下：今回の参加者は200余名いる本学の留学生の中から、出身地域、専門、学年、性別等がなるべく幅広く反映できるよう配慮しながら人選したので、少ない人数ながら、様々な意見が聞かれたと思います。話にも出ているとおり、留学生達は異文化適応に苦慮しながらも、日々研究に励み、日本語の学習にも果敢に挑戦しています。土曜日や休日、あるいは夜遅い時間に日本語クラスを出してほしいというような要望は、他の大学機関ではまず聞かれることがありません。全体のほぼ1／3の留学生が参加している日本語クラスなので、これからも内容を充実させて留学生の希望に添えていくようにしたいと考えています。また、日本人の友人を作りたいといった切実な願いや、ホームステイがしたいというような要望には、センターとしても学内関係者、あるいは学外の方々のご協力をいただきながら支援していきたいと思っております。

現在、アジアへ学生ボランティアを送らないかといった引き合いも来ております。外に開かれた大学として将来的には、日本人学生の留学やボランティア活動に関するアドバイスもしていきたいと考えていますので、センターからの情報発信にご期待ください！

都河：お台場に設立された国際研究交流大学村の開村記念フェスティバルがあり、7月10日に国際シンポジウムの第2部『日本留学への期待と現状』というテーマ別分科会がありました。東京医科歯科大学から博士課程1年のファディ・サラメさんが「医療を通じた国際貢献ー私の研究と日本への期待」というすばらしい発表を日本語でしました。

5名の日本留学経験者が、日本の大学や日本人に対して色々な問題提起をしてくれました。中でも面白いと感じたのはカナダ人の発表で、カナダの大学では授業料を払っている学生はお客様であり、大事に扱うという市場原理を導入しているが、日本の大学の学生（日本人・外国人留学生）は、大学における立場が弱いと発言された点です。外国の大学では日本の国立大学のように国から経費を支給されないの、運営のために如何に魅力ある大学にするかが教官に課せられている仕事のひとつなのだとことです。また、殆どの報告者が日本人とのコミュニケーション不足を訴えておられました。挨拶しても返事をしてくれない、目を見て話さないなどです。

本座談会での留学生たちも同様に、日本人との交流を望んでいます。教職員、日本人の学生の皆様、留学生に会ったら一言声をかけてくださるようお願いします。

本学の国際化に向けて留学生センターの役目は大きいと考えています。



留学生センター

ー留学生センターからのお知らせー

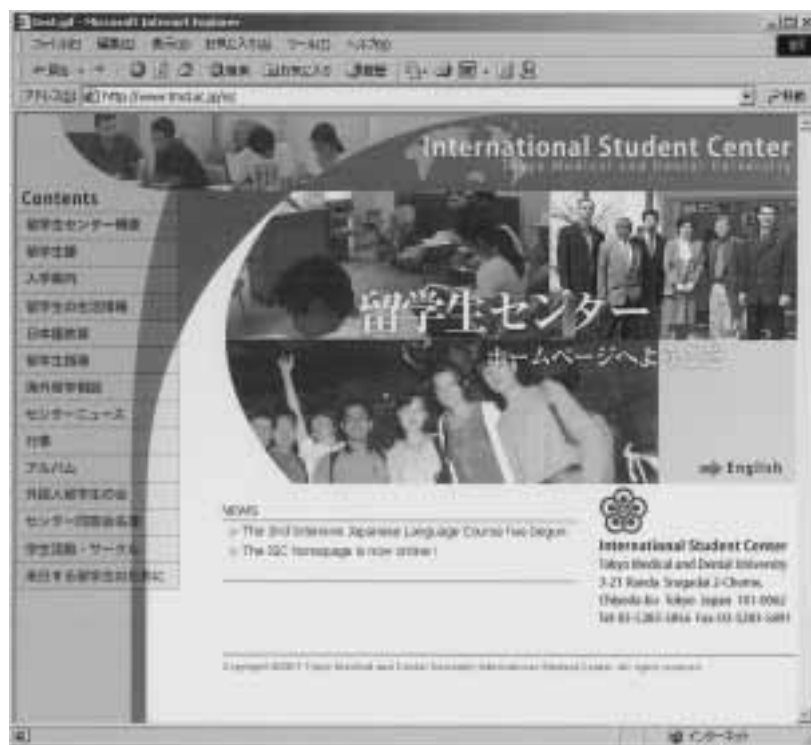
☆ホームページ立ち上げ完了！

<http://www.tmd.ac.jp/isc>

このたび、留学生センターでは完全バイリンガル版のホームページを立ち上げました。留学生の皆さんや学内・学外の方々にも大いに利用していただき、こうしたらよくなるといったご意見やアドバイスをいただけたら幸いです。

☆留学生センターロゴ募集！

発足1年足らずの本センターにはまだロゴがありません。そこで、この場を借りて皆さんからロゴを募集したいと思います。国際交流、異文化間における知識の交換の場、といったことをイメージしたロゴを考えてください。コンピュータグラフィック歓迎です。採用させていただいた方には、東京医科歯科大学グッズ一式をプレゼントします。[マグ、ペナント、絵葉書、東京医科歯科大学マーク付き文鎮]



座談会

Round-table Talk with Students

The International Student Center (ISC) held a Round-table talk with the ISC Professors and five foreign students in the Center lounge on June 21, 2001.

The participants were :

Prof. Sayoko Yamashita, Ed. D. (Japanese Education)

Prof. Akiko Tsugawa, D. M. S. (Advising and Counseling)

Ji Nan [China], Research student, Allied Health Sciences

Milena Apostolova Angelova [Bulgaria], 1st year GS, Anesthesiology and Critical Care

Moses Atanda Akanmu [Nigeria], 2nd year GS, Neuroscience systems, Biocybernetics

Teerasak Damrongrungruang [Thailand], 2nd year GS, Masticatory Function Control, Masticatory Function Rehabilitation

Sherif Awad Shoukry [Egypt], 4th year GS, Dermatology and Immunodermatology

The following were the topics of the talk :

- Why did you choose TMDU?
- Students' research topics
- Differences between TMDU and students' home institutions
- Likes and Dislikes about Japan
- The Japanese Language
- What Students want from the Japanese program?
- Messages from the Faculty

Professor Yamashita began with an introduction of the TMDU Ryugakusei Center. The Center began its first program last April as the thirty-second center for international students

founded by the Japanese government. At present, about one-third of the international student body (208 students from 39 nations and one region) are studying Japanese Language and culture at the Center. Last year, the first year since its inception, the Center also provided students with a variety of activities and events.

At first, TMDU students were asked why they chose TMDU. The student from the Thailand chose because it has a sister relationship with their home university and therefore there are many 'senpai' (senior students) here. The students from Bulgaria and Egypt said that although they couldn't study medicine in their home country the way they like, it is possible in Japan with scholarships from the Japanese government.

The students were then asked about what they are doing at TMDU now and the differences they feel between TMDU and their home institutions. They each briefly described the research they are working on. Regarding the differences, all students pointed out that TMDU has comprehensive facilities for advanced research and studies of medicine/dentistry. Many also addressed the differences between the internship system in TMDU and within their home institutions.

When asked what they liked and disliked in Japan, the students' replies and opinions ranged from culture, public manners and so on, to individual preferences. Particularly interesting was their dislike of the Japanese habit of smok-

座談会

ing while walking on the street, and their surprise at the Japanese inconsideration towards pregnant women in the train. Overall, as Professor Tsugawa pointed out, it seems that many foreign students feel that the longer you stay in Japan, the more you become dissatisfied with being here. This is quite opposite to the experiences of foreign students in the U.S.

About the study of the Japanese language, all thought that learning Japanese was very important for living and conducting their research in this country. Before coming to Japan, they were told by the staff of the Japanese embassy that even though they didn't know Japanese, there's no problem living here as long as they spoke English. However, this turned out not to be true when they came here. "You need to use Japanese everywhere from banks, post offices and so on," said one student, "And it came home to me that studying Japanese is important for both daily life and research". Another said that studying Japanese everyday at the Center helps a lot.

Finally, the students were asked what they wanted from the Ryugakusei Center program. Overall, their needs came down to one point: they need contacts and communications with Japanese people: they wanted to have a place

where they can make friends with Japanese students both on and off campus. For example, they want to have a trip with Japanese students, sport events, home-visits, and so forth.

In reply to this, Professor Tsugawa told them that the Center is planning home-visit events and joint activities with Japanese students and people in the vicinity.

In concluding the talk, Professor Yamashita and Professor Tsugawa said the following:

Professor Yamashita: I will take every effort to make the Ryugakusei Center program rich and substantial in content and easily accessible for foreign students. I understand that they really need communication with Japanese students and that they also want Japanese friends. I would like to ask for cooperation from the staff of TMDU and people from outside to support our foreign students.

Professor Tsugawa: I also understand that all foreign students here in Japan need to communicate with Japanese people and that our foreign students at TMDU are no exception. So, I would like both the staff and Japanese students at TMDU to say hello to foreign students on campus whenever they can. I know that our job at the Center is very important to internationalize TMDU.

Please visit the International Student Center's bilingual homepage at
<http://www.tmd.ac.jp/isc>



レネ・フォックス博士を 本学にお招きして



教養部 心理学
教授 山崎 久美子

はじめに

本学の国際交流基金の援助を受けて、鈴木章夫学長が、レネ・フォックス（Renée C. Fox）ペンシルバニア大学社会学部アンネンバーグ記念講座名誉教授を本学に招聘（招聘期間：2001年4月2日～17日、24日～5月2日）されました。フォックス博士は、国際的に著名な医療社会学者で、現在も同大のバイオエシックス・センターに特別研究員として籍を置きながら、世界の第一線で活躍されております。滞日中にも、ベルギー国へ「フランキ賞（ベルギー版のノーベル賞）」の審査委員長長の任を果たすべく、一時出国されました。また、本学での一連の仕事を終えて米国に帰国されてまもなく、ドイツ、ベルギー、フランス、ロシアと世界を精力的に駆け巡るといった多忙な毎日を送られました。そのようなフォックス博士をこの度本学にお招きできたことは私どもにとって大変貴重な機会となりました。ここに、フォックス博士が残してくださった果実の一端をご紹介して報告に替えさせていただきます。

フォックス博士の研究と著作

フォックス博士は、ハーバード大学において医療社会学者の Talcott Parsons 教授に師事し、博士号を取得されました。師パーソンズは患者医師関係に関する古典的な機能論モデルを構築したり、医療のもつ社会統制機能から患者の問題を考察したことでつとに有名です。博士は院生の時に、師と共著で最初の業績を残しました。博士のもっぱらの研究手法は、フィールドに出かけて、データ収集を行うというもので、約半世紀もの間、医療の現場で参与観察者として、貴重な記録を残し続けました。直接の参与と観

察、対象者とのインタビュー、記録文書の分析を行い、その結果生まれた代表的な著作として、膨大な論文の他に以下の著書があります。『危険な実験—未知に直面したときの医師と患者』（1959年刊）、『医師の役割の増加』（1959年刊）、『失敗への勇気—臓器移植と透析の社会的な観点』（1974年刊）、『医療社会学エッセイ集—新しい分野の開拓をめざして』（1979年刊）、『スベアパーツ：米国社会における臓器交換（邦訳『臓器交換社会』）』（1992年刊）などです。最初の頃は、フィールドで必ずしも歓迎されず、ご苦労も多かったようですが、博士が決して医療を告発することなく、忠実な記録文書を蓄積・公表していった姿勢がやがて受け入れられていったことを強調しておきたいと思います。内部者の視点から事象を理解することを目的とするために絶えず観察の対象に関心を持ち続けながらも、常に一定の距離を保つということが求められ、そのスタンスを貫くことに忍耐が要るということです。それを博士は detached concern（距離を置いた関心）といい、場合によっては研究者は燃え尽きそうになるという切実なお話が印象的でした。

フォックス博士の滞在プログラム

招聘期間に合計33のプログラムが用意され、延424名の参加者がありました。多くは、医学部附属病院B棟16階の眺望の良いきれいな小会議室を博士との交流の場とし、毎日そこに関係者が集うことになりました。最初の3日間は私どものことを理解していただくためのセッションを設け、日本の戦後の教育改革から現在の医学・歯学教育制度について、また、日本の医療・歯科医療、日本の医学教育・歯学教育・

看護教育の現状、本学の特徴などが担当者から博士に説明されました。博士の最初の講義は4月3日の午後に行われ、若い研究者を中心に学内から14名の参加者がありました。そこでは、参与観察者として患者中心の臨床研究に携わった45年間の回顧されました。筆者は熱弁をふるわれた博士の姿を今もって忘れることができません。4月5日の午前中は、『臓器交換社会』の訳者である浜松医科大学の森下直貴氏を話題提供者として、日本の医学部におけるバイオエシックス教育の現状について意見交換がなされました。ベルギーに発たれる前の講義は、基本的には、博士の著書である『医療の社会学』をベースに、「医学生の子社会化の過程」「健康と病気の社会的・文化的意味」「専門職」とは何か」「社会的・文化的世界としての病院」「参加観察研究」「医科学と医学研究」などについて、医療社会学の初学者にもわかるように、具体的な話を盛り込みつつ、講義が行われました。

博士は、「医学および生物医学・行動科学研究における倫理問題検討のための大統領委員会」の委員（2年の任期）を社会学分野を代表して務めた経歴や、主に遺伝子組換え技術をヒトに使用する際の倫理的、社会的、法的問題を明らかにする作業班に参画して活動した経験などについて話されました。博士の学識は、医療社会学のみならず、倫理面にも深い造詣を有し、国立科学技術会議の医学部倫理委員会のメンバーなど多くの要職に就かれたご経歴もあり、



講義風景（医学部附属病院 B 棟16階小会議室）



病院見学（鶴田恵子看護部長と中村禮子副看護部長が同行）

私どもを大いに啓発してくださいました。続いて、臓器移植の社会学的・倫理的側面について2日間にわたり講義され、朝日新聞の取材にも応じられました（2001年5月30日夕刊13面に掲載）。

私どもは博士に本学の病院や研究施設をご覧いただきたく、医学部附属病院、歯学部附属病院、生体材料工学研究所にご案内いたしました。博士は、医病では、透析室や霊安室に特に興味を示され、歯病では、病棟の難しい疾患の患者さんの治療を歯科医師だけで行っている現状に驚かれ、生材研の人工臓器研究開発施設では、高谷教授とのディスカッションを楽しまれたご様子でした。博士は看護部長にスピリチュアル・ケアの重要性を強調されておられました。

ベルギーでの用務を終えて戻られた後も、博士の気迫は衰えることなく、保健衛生学研究科の有志や看護部を対象に、Caringの文化、看護臨床場面における倫理的ジレンマ、看護の質的研究のためのインタビューをめぐる諸問題について聴衆をたくさん集めて、講義がなされました。離日直前の講義では、博士の

国際交流



学長主催講演会会場（鈴木章夫学長とフォックス博士）

代表的な仕事となった医学・医療の不確実性論をじっくり話していただきました。

学長主催講演会の開催

4月26日の午後2時より、歯学部特別講堂にて、学長主催講演会が開催されました。学生や外部からの参加者も多数集まりました。この日のために準備された演題は“ The Human Condition of Medical Professionals ” というもので、医療専門職に関わる人間としての不可欠な要素が盛り込まれておりました。筆者が司会を務めさせていただきましたが、これは大変光栄なことでありました。

最初に主催者である鈴木章夫学長よりご挨拶がありました。博士が1950年代に社会学の概念をフィールドワークを通して医療の中に持ち込んだこと、多くの著作や論文の中で、とりわけ「医学生の不確実性への訓練」「『距離を置いた関心』への訓練」という論文が注目をあびたことなどが紹介されました。そして、心臓外科医として有名な Dweight Harken 教授、代謝疾患を扱う病棟で活躍していた Francis Moore 教授、ノーベル賞受賞者の J. Murray 教授、人工腎臓や人工心臓のパイオニアである Will Kolf 博士など、フォックス博士が学長と共通の友人と接点を持ちながらフィールドワークを行ってきた

ことを知った喜びを話されました。続いて、医療社会学とバイオエシックスを専門としてきた博士を前にして、日本の医学部では昨今、医の倫理はかなり教えられているが、医療の社会的側面に関する教育は不十分でもっと教えられるべきであることを強調されました。最後に、自分は若い時にポリオに罹患した天才的な友人である学者を2人持っていると言われたあと、1人は Arther Guyton 教授、もう1人はもちろんフォックス博士であると、膨大な業績を作り上げたことに言及し、賞賛されました。

講演の内容は7つの部分から構成されており、その全文がまもなく訳出され、『みすず』（みすず書房刊行）に掲載される予定です。医師や看護職などを目指す学生は、教育課程の中でさまざまな訓練を受けていきます。そこでは、医療には神聖な側面と冒瀆的な側面があることも知っていくことになり、その過程で、実に様々な体験をしていきます。また、切迫という事態や不確実性の中で生き抜いていかなければなりません。その際、自分の心理状態を自覚し、自分の感情に向かい対処していくことも必要となります。たとえば、自分を守るためのユーモア、これは多くの場合否定的な感情から引き起こされる緊張の緩和に役立ちます。医療の現場で仕事をする際のストレスをどう取り扱うか、興味

国際交流

深い症候群“the celebration syndrome”についても言及されました。医療に従事する中で燃え尽きることなく、病める人々の援助者としてよい仕事を続けるためにどんな要素を人間として備えていったらよいか、博士の講演は大変示唆に富むものでありました。そして、医療者の文化の特性、医科学の現状に内在する特質、医学生や医師の認知上の特性と感情的な問題が具体的に紹介されて、とても理解しやすい講演であったと思われます。

講演後の質疑応答も、通訳の労をお取りいただいた森尾郁子先生のお力に助けられて、実に活発に行われ、とりわけ米国とヨーロッパでは医療・医学の不確実性の暴露が大きく異なるという博士の説明には考えさせられるものがありました。意見交換も尽きて予定の時間が少し過ぎたところで、大学を代表して鈴木学長より敬意と感謝を込めた記念の楯が博士に贈られました。



フォックス博士に敬意と感謝を込めて楯を贈られる鈴木章夫学長

謝辞—おわりにかえて

最後になりましたが、フォックス博士を招聘してくださいました鈴木章夫学長、国際交流基金の援助を受けるための細かい事務的な手続きを全面的にサポートしてくださいました総務部総務課の皆様、側面から温かい援助をくださいました医学部学務課の皆様、そしてなにより博士の一連の講義に熱心に参加し、意見交換をされた学内外の皆様には事務局を代表して心より感謝申し上げます。有難うございました。



講演後の質疑応答（フォックス博士の左側には通訳の森尾郁子先生）

公開講座

教養部公開講座 報告

平成13年8月16日（木）から24日（金）までの間、東京医科歯科大学・教養部公開講座が開催されました。今年も昨年同様、次世代教育を念頭に置いた「スポーツ公開講座（ジュニア水泳教室Ⅰ，Ⅱ）」と「夏休み子供自然科学公開講座 A，B」が実施され、市川市をはじめ隣接する松戸市や東京都からの参加を含め多くの小・中学生が国府台キャンパスに集いました。

ここに各講座を担当した各教官から、それらの報告をいたします。

スポーツ公開講座（ジュニア水泳教室）

教養部 保健体育学

助教授 水野 哲也



今年も8月16日（木）～24日（金）土日を除く6日間、恒例のスポーツ公開講座（ジュニア水泳教室）が行われました。今年は「みんなと泳ごう，ジュニア水泳教室」と題し、

“泳げる子も泳げない子もみんな集まれ!!”をキャッチフレーズに、下は小学1年生から上は中学2年生まで、それぞれの泳力向上とふれあいを求めて午前の部、午後の部合わせて64名の子どもたちが本学国府台キャンパスのプールに集いました。

写真にもありますように、子どもたちは午前、午後とも3時間の水泳実習を真剣な眼差しと大いに楽しむ心をもって、目一杯動き回っていました。今年から対象を市川市だけでなく、隣接

する松戸市や東京都にもその募集母体を広げて実施し、その結果としてこれまでも何度かこの教室に参加したことのあるいわゆる「常連組」に加えておおよそ半数（30名）の「新人組」が加わっての水泳教室になりました。

この教室のモットーは、昔から前述したキャッチフレーズにもあるように、泳力に関係なく、また年齢の上下差なくみんなで楽しく泳ぎを学ぶことであり、従って子どもたちもそうしたリラックスしたまた家庭的な雰囲気の中、本学水泳部員が務めるコーチ陣の厳しく？も優しくまた暖かい指導の中で、日に日に泳力を向上させるとともにそのふれあいを深めてゆきます。今年も何人かの「金槌（カナヅチ）」の受



講生がおられましたが、終了時にはみんな少しは泳ぎをマスターし、満足そうな笑顔で喜んでおられました。

また、今年のハイライトは何と言っても二世代に渡る水泳を通してふれあいと交流が生まれたことです。今年初めてこの教室に参加された寺尾亮祐君（6才）は現在東京三育小学校に通う小学校1年生。実は彼のお母さん寺尾和子さん（旧姓下村和

公開講座

子さん)は小中学校時代に本教室の受講生だった方です。現在のお住まいは東京都杉並区ですが、お子さんがこの教室に参加の間は市川市にあるご実家からの参加となりました。昨年も紹介しましたようにこの教室も早27年目を迎え、これからもこうした世代をつないだふれあいと交流がどんどん発展することを願って止みませ

ん。

最後になりましたが、この教室の実施に当たり本学水泳部員の協力はもとより、多くの事務関係の方々また地域の方々のご協力を頂きました。ここにこの紙面をお借りして深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

夏休み子供自然科学公開講座

教養部 生物学

教授 服部 淳彦



平成13年8月16日(木)、17日(金)の両日、市川市及び松戸市在住の小学生(高学年)を対象に、**夏休み子供自然科学公開講座(「なぜ?」から始める理科の自由研究)**が開催されました。本年度は16日(木) 26名、17日(金) 26名の計52名の小学生が参加し、本学の2年生(医学科と歯学科)13名の協力のもと無事終えることができました。

この公開講座は、大学開放事業の一環として、生物学と化学の教官を中心に、教養部の学生の協力を得て、小学生に自然科学の面白さを体験してもらおうという企画です。一方では、本学の学生にとっても、多様な個性と能力を持った小学生を指導することによって、それぞれのレベルに合わせて教えることの難しさや楽しさ、さらには身近なものを題材にした自然科学に触れる面白さを、子供を通して感じてもらうという狙いもあります。本年度は、英語と数学の教官に参加していただき、前年度に引き続き実際に観察したプランクトンや自分で採取した昆虫などを題材に、それらに触れた喜びを俳句といった言葉で表現する企画とコンピュータを使って夏休みの自由研究としてまとめるための情報を集めるといった取組も導入しました。なお、子供たちにはこの公開講座が終わっても、

継続して自然観察が行えるようにと、携帯用の小型実体顕微鏡(公開講座時に使用したもの)を各自に渡しています。以下は今年の日程の概略表です。

- | | |
|-------------|---|
| 10:00~12:30 | 見えない世界をみてみよう
光学顕微鏡を用いた観察
(動物・植物プランクトンなど) |
| 12:30~13:00 | 昼食 |
| 13:00~14:00 | 昆虫採集と実体顕微鏡を用いた観察 |
| 14:00~14:30 | コンピュータを使って情報を集めよう |
| 14:30~15:00 | 観察した感動を俳句に残そう |
| 15:00~16:00 | 実験をしよう
1)ゼリーや野菜、果物で電池を作る
2)試験管の中でケミカルガーデンを作る
3)ホタルの発光を見る |

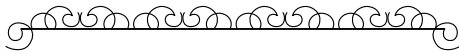
また、公開講座の期間中に、市川市環境部の方々の訪問やテレビ市川と市川よみうりの取材

公開講座

を受けたことは、この活動が徐々にではありますが地域の人々に注目され、また根ざしてきたことのあらわれではないかと思います。事務の方々を始め、これまでこの企画を支えてくださった多くの方々にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。



チンパンジーと怪物



教養部 英語

助教授 畔^{くろ}柳^{やなぎ}和^{かず}代^よ

4月、国府台ではガイダンスを聞き終えた新生が、緊張による疲労と午後の眠たさをこらえて TOEFL を受ける。この結果は英語 I（必修）のクラス編成に用いられる。約8か月後、2学期末、1年生は再び TOEFL を受ける。今度は試験後の疲れと安堵、朝の眠たさと風邪による体調不良等に耐える。この結果は英語 I の成績の一部となる。

英語 I は「聞く・話す」を主とする Ia と「読む・書く」を主とする Ib から成り、学期ごとに担当教師が変わる。両方を2学期にわたって週に一度受講し、計4クラスでの平常点、12月の TOEFL、面接の成績をもとに、全体の成績が出る。「面接」は2学期の終わりに数名ひと組で行なう。英語でネイティブ・スピーカーと話し、グループの人と意見交換をする。「聞く・話す」のまとめである。これに対し、「読む・書く」の授業には、一斉に受ける試験という形での仕上げはない。

「読む・書く」Ib では、一回の授業で読みきれぬ長さの英文を集めた、PRISM という教科書を使う。教育改革・改善プロジェクトの一環として作った本である。編集やデザインについては有能で我慢強い助っ人に頼った。作業の進行はいつも綱渡りで、最後は印刷屋さんにも無理なお願いをして完成する。平成11年度から使い、現版は第三版である。

内容は7章構成、章題は“Mind,” “Body,” “Earth,” “Life,” “Love,” “Sexuality,” “Language” とつづく。文章の初出年にはこだわらず、各章にノンフィクションとフィクションを取り混ぜて3本入れることを基本方針とした。21本のうち、1990年代後半に発表された文章は10本、すべてノンフィクションである。古い文章は小説が多い。一番古いのが『ガリバー旅行記』（1726）、不死の人々について読む。

4月、刷り上がった教科書が届くと、ほっとする。教室へ大事に運び、学生に渡し、爽快な気分になる。でも、それは一瞬のことだ。使う段になると、欲が出る。長篇から選びぬいたはずの一節に加えて、さらに見せたい部分が頭をよぎる。学生の負担増もかえりみず、読みたく（読ませたく）になってしまう。

たとえば、“Body” の章の『フランケンシュタイン』（1818）。怪物が雌のパートナーを作ってくれと科学者に訴える場面を読む。科学者はここでいったん引き受けるものの、果たさない。同じ章には、クローニングと生命観をめぐる記事、妻を亡くした男と臓器提供を求める病院関係者のやりとりを含む短篇がつづく。

“Language” の章では、『マイ・フェア・レディ』（1956）、男女の話し方の違いを考えるエッセイ、「話せる」チンパンジーについての文章を読む。1960年代後半、ネバダ大学では言語の根源を考えるためにチンパンジーの赤ちゃんに手話を教える実験が行なわれていた。

人間ではないものとの言葉による交流といえ、フランケンシュタインが造った生き物に再び思いが至る。怪物の言葉は人間の記憶と記録を経て、残る。死を目前にした科学者が語り、聞いた人が記し、記録をイギリスへ送るのだ。だが、「言葉」を知らなければ、怪物と呼ばれる人造人間の語り自体、あり得ない。科学者に会いにいく前に、怪物は憧れの一家を観察することで、言葉というものを知り、単語や発音を学び、物事の間係を修得していた。PRISM に載っていないこの部分が、おまけに読みたい一節となる。

大きなペーパーテストを受ける代わりに、PRISM のどこかを（英語のままで）楽しんでもらえればと願っている。極論だが、読む教科書としての役割はそれで充分なのだ。

1学期の感想カードを読み返して 思うこと

教養部 人間科学教育担当
助教授 中村千賀子



2001年7月22日から8月24日の5週間にわたり、医学科、歯学科の2年生と保健衛生学科1年生の一部の137名が夏の学外体験学習に参加する。体験学習の目標は、1年次における自由教育、あるいは2年次の1学期に組まれている学外施設・機関からの講師の講義など、教室で学んだことを、自分自身が人々と関わる中でさらに吟味し、自分と他の人々を体験的により深く理解することである。

学生は、1学期に医学部の喜多村健教授と歯学部三浦宏之教授（講義概要はすでに『医歯大ひろば』6月号に掲載）、医学部OBの長谷川幹先生、歯学部OBの築山雄次先生、クボタクリニックの水野高昌先生、在宅ケア協会の外山誠先生、ペットレスキューの藤原博史先生、新生会の原慶子先生から講義を受けた。その講義の度に学生はB5版のカードに感想を記入し提出した。そのカードを1学期終了直前にすべて学生に戻し、読み直しての感想をあらためて提出させた。カードが自分自身を振り返る一つのきっかけとなることを教師は期待するからである。もちろん、感想カードは氏名だけ記載して提出してもかまわないこと、また、このカードは人間科学教育担当の教師だけが目を通すことを、1学期の初めに学生に伝えている。

ここでは、1学期分の感想カードを読み直しての3学生の改めての感想を、学生の人間科学教育の1学期の振り返りとして紹介したい。

医学科学生

今、自分の書いたカードを読み返してみると、そのときの講義を聴いて感じたこと、考えたことが思い出されます。思うことは今までなんとなく漠然と考えていたり、こうあるべきではと思っていたこと、自分の中で消化し切れなかったものが、多くの刺激ある話を聞き、文章にしようとする中で自分なりに多少はまとめられてきたのではないかなと思います。医療者を目指すということは相応の責任が課せられていくのであり、その中で今までも少しずつ考えてきたことがあり、ぼんやりと理想像のようなものがあったわけですが、今までの講義でそれがよりクローズアップされ、徐々に形をなしてこれたような気がします。もちろん、これらがまだまだ断片的なものであり、もっと多くのことに触れて、今後もこういった医療者でありたいか

ということは常に考えつづけていくとは思いますが、そのための大きな材料になったと感じています。

具体的に講義内容に関して述べるならば、今、カードを見て気づくことは、どの先生の話の中にも共通して出てきている重要な事柄があると思います。それは、相手（患者）とのコミュニケーションということです。これは人間科学教育の授業すべてを通して言われていることだと思います。我々が将来相手にしていくのは病気ではあるけれども、病気を内に抱えた人間であるということ、そしてそれを目の前にしたとき、通常でない状態となった人間と相対するときに必要な配慮やその難しさといったことが、講師の実体験として話されていることで、非常に強く感じられました。特に僕が強く印象を受けたのは「患者さんと共有する」という言葉でした。多くの場合、特に日本では伝統的に医者と患者

には上下関係ができてしまいがちであると思いますが、これは我々が求めるべきものではないでしょう。「共有する」という観点は非常に自分にとって新鮮で、今、感じている、求めるべきものにもっとも近いように思われました。多くの事柄は今後、学外での体験学習や、実習、さらには実際の勤務をしていく中で、さらに積み重ねられていくと思います。その前にゆっくりと考える時間と素材があったことは喜ぶべきことだと思います。

医学科学生

1学期間、この授業を受けて思うことは、人と人とのやりとりの間で何気なくやっていること、もしくは気づいていないことについて考える機会が増えてよかったということです。相乗効果として、授業外でも何気ないことで考えることが多くなりました。新聞の記事、NHKの「クローズアップ現代」や様々なドキュメンタリー番組、あるいは漫画を読んだときでさえ、色々と思い、考え、考察するようになりました。最初の自分の日記では金曜日はいつも人間科学の授業のその日の感想や講義の内容のまとめ、また、感想カードにはズバッとはかけないような反論なども書き込むようになり、かなり長い日記になってしまいます。

今回、感想カードを返却されて読み返してみると、自然と日記も読み返して、授業中の講師の顔、話、内容など様々なことが記憶としてよみがえってきます。このようなことがいつまでも続き、自分の人間としての理想像、ひいては医師としての理想像を暗中模索の中から築き上げられればいいと思います。また、このように考えることが習慣となってきたので、いつまでも忘れずに考えていきたいです。

この人間科学教育は自然科学や人文科学と並行してあるわけだが、違う側面から見ても意義深い。現代、日本は人生80年時代で、織田信長が「人生50年」と謳った400年前からすれば、30

年のおまけがつく時代です。しかも、それは手放して喜べる健康ではなく、身体や心に傷の一つや二つは誰しも持ちあわせています（そうであれば医者はいらない？）。医師、医学、医療はこのような時代と社会にこれからどうやって向かっていかなければならないのか、もしくはこれからどういった心構えが必要か、決まった答えはないけれども、自分が歩む人生の中で少しでも充実した答えを築き上げていきたい。

「ひと」は「ヒト」であり、「人間」であるということが基本にあるのだから、「ヒト」の側面をもつ生物学、物理学、化学、数学を学び、「人間」の側面を持つ芸術、思想、歴史学、経済学などを自分の中に取り込み、自分の器の準備範囲を広げるという意味で、教養は人を豊かにする材料であることは間違いないようです。もちろん、体力を必要とするスポーツも大切でありますけれども（最近、こっちに偏っている生活になっています）。

最後に、1学期の講義はどれもおもしろかったのですが、いくつかの講義を聞いていると、その人の考えというのも大切だけれども、アウトプット、つまり、口に出して相手に上手に伝えるスピーチ力というのも強い武器になると感じました。特に、5月25日の体験学習に向けてのクラスでのグループ・ディスカッションを終えてから、その内容をまとめて発表してみて、自分ではそこそこうまくできたつもりでしたが、やっぱり、インパクト性では薄かったような気がします。人を惹きつけるということは自分を信頼してもらうことにつながるので、その力もつけていきたいと思います。

歯学科学生

私の感想カードには、外見的に一つの一貫した特長が見られると思います。それは、感想カードがひどく短いこと。これは一つ一つの感想カードを提出する度に感じていたことなのですが、このようにすべての感想カードを一度に見せら

シリーズ人間科学教育

れると改めて感想の短さ、淡泊さを強く再認識しました。

そして、さらに思うことは前述した特長を私の問題点として捉えるべきであるだろうということです。なぜなら、この感想カードの意図するところは、いろいろな施設から来られた方々の話を聞いて自分の心にわきあがった感情や思いを言葉で表現することで（またはそうしようと試みることで）、そのわきあがった感情とはどういうものかを整理し、体系的にそして深く理解するところにあるとうかがっていたし、私もそのような（自分の感情や思いを言葉で表すというような）姿勢はとても大切なことであると感じているからです。突き詰めれば、自分の身に起こった感情の揺れを言葉で表していくという作業の積み重ねの果てに「汝自身を知れ」という命題に答えることができるものがあるのかもしれないとも思います。

さて、感想文が短いということが示していることは、大きくわけて二つのことがあると思います。その一つは、私が「知らない」という事。これはどういう質の「知らない」かというとグループ・ディスカッションの時に先生から学生に対して指摘のあった「知らないということを知らない」という類の「知らない」です。つまり、様々な話をしてくださる方たちの話にみあう知性がないと言うことで、これは人間科学教

育の講義全体（人間科学基礎 a.b.c.d）を通して感じることです。何とかしたいと思います。

また、二つ目は、自分の感情や感じたことをすばやく、的確に言葉に直すということが苦手であるということです。これは、医療者にとって、というよりも、人間として致命的であると思うので、これまた、何とかしたいと思います。人と人との関わりにおいて、言葉というものはとても大切だということを感じ始めたと同時に、とても難しいものでもあると痛感した、この一連の感想カードでありました。

「自省」とは医療者にとって不可欠な行為であることが熊本大学医学部教授の小川道雄先生の言葉でした。常に自分の行いを省みること、そのためには感情や思いを見つめ、言葉とすることがとても大切ですからそういったことを意識してこれから生活できたらいいと思います。

学生たちは今、夏の学外体験学習の真っ盛りである。普段自慢にしている茶髪を黒く染め、あるいはモソモソのやぎひげをそり落とし、いつもははきなれない丈の長いスカートを身につけて汗をかいていよう。学生が1学期の講師の方々の講義から得たものを深く理解し、より広げて8月31日からのクラスに元気で帰ってきてくれることを期待している。



「犯罪被害者相談室」活動

—第34回キワニス社会公益賞—

難治疾患研究所 社会医学研究部門

教授 やま 山 がみ 上 あきら 皓

東京キワニスクラブは、世界78カ国に32万人の会員を擁する国際的なボランティア組織「キワニスクラブ」の支部組織で、1966年に「キワニス社会公益賞」を制定し、福祉活動に献身的な努力を続ける個人や団体を年度ごとに表彰している。私は1992年3月に開始した「犯罪被害者相談室」活動を評価され、代表者として受賞したものである。

「犯罪被害者相談室」の開設は、1990年のアメリカの犯罪対策の視察において、アメリカ社会が犯罪被害者の保護と支援に積極的に取り組んでいることを知ったことがきっかけとなった。ニューヨークのある病院にはレイプ・クライシス・プログラムがあり、30人のボランティアが交代で24時間電話相談を受け、救急外来を訪れるレイプ被害者にはいつでも女性ソーシャルワーカーがずっと付き添っていた。理解ある援助者が寄り添うことで、どんなにか被害者は支えられ、回復も早められることかと思った。翌年開かれた犯罪被害給付制度10周年記念シンポジウムでこの報告をしたところ、会場から、飲酒運転によるひき逃げで息子を亡くした母親が、「日本では被害者は大きな声で泣くことさえできず、じっと我慢するほかはないのです。一步でもいいですから踏み出してください」と訴えられた。この訴えに答える形で、1992年に相談室の活動が開始されたのである。

「犯罪被害者相談室」活動は、私たちに貴重な学術的成果をもたらした。そこでは、我が国で初めてのトラウマ・カウンセリングが、組織的に実践された。多くの相談例をもとにPTSDについての先駆的な研究が行われ、その成果が評価されて1996年より3年間セコム科学技術振興財団の寄付を受け、「被害行動学研究部門」が開設され、そこから小西聖子（現武蔵野女子

大学教授）らの専門家が育っていった。また警察庁の依頼により被害者支援に関わる各種調査を行い、1999年には警視庁の協力を得て、事件後間もない時点での犯罪被害者の実態についての画期的な調査も行った。

「犯罪被害者相談室」活動は、社会的に大きな反響を呼んだ。被害者が受けた心の傷の深さと、その後遺症としてのPTSDの深刻さなどが知られるにつれ、被害者問題への社会の関心が深まってきた。それとともに、被害者自身が社会に向かって様々な形で支援の必要性を訴えることができるようになり、さらに、警察が本格的に被害者対策に取り組むようになったことから、急速に、各地に民間被害者援助組織設立の動きが進んだのである。

犯罪被害者相談室は民間被害者援助組織のリーダーとして、各地の民間援助組織の立ち上げに協力し、ボランティア研修のための研修会を開いたり、研修用ガイドラインを作成するなどして、被害者支援活動の全国的展開を促す役割を果たした。活動のより一層の充実を求めて法人化を求める声が高まり、警視庁の協力によって2000年4月に「（財）被害者支援都民センター」が設立され、犯罪被害者相談室は発展的に解消されたものである。

急性腎不全における細胞周期調節遺伝子の役割

大学院医歯学総合研究科 体内環境調節学分野

助手 寺田典生



この度、日本心血管内分泌代謝学会会長推薦演題賞を受賞しました。この賞は日本心血管内分泌代謝学会の発表演題の中で、特に臨床研究を対象とし、学会会長である大阪大学大学院の荻原教授の推薦で、決定される賞であり、受賞させていただき、大変光栄に思っております。これをきっかけに、“マイ・リサーチ”に私の研究を紹介させていただく機会を得ました。

私の受賞対象となった研究は、急性腎不全（ARF）における細胞周期調節に関する研究です。現在腎不全で血液透析を受けている患者さんの数は20万人に達し、腎不全にいたる、急性腎不全や糸球体腎炎の病態の解明、新しい治療法の開発は社会的に見ても急務であります。急性腎不全約50%の患者さんが、死亡あるいは維持透析にいたり、有効な治療法が確立されていないのが現状です。特に病初期の予後診断には明確な指標がありません。ARFの尿細管障害の回復過程では、細胞増殖と尿細管細胞の再生がおきると考えられています。今回、我々は細胞増殖、再生の観点からARFの予後の規程因子としての細胞周期調整遺伝子であるE2F1の発現の意義と尿細管細胞回復のメカニズムを検討しました。私どもは、当教室の関連病院の横須賀共済病院の先生方の御協力を頂きまして、本院の症例とあわせ、過去20年間で、腎生検を施行したARFの41例を対象にしました。

ARF41例において、E2F1の免疫染色を行い、尿細管の染色を定量的に解析し、腎機能の予後との関係を検討したところ、ARF後、腎機能の回復した14例においては有意にE2F1の発現が近位尿細管を中心に認められました。一方腎機能の回復しなかった27例においては、E2F1の発現は低下していました。さらにこの臨床データーを裏付けるために、両側腎動脈閉塞によりARFラットを作成し、E2F1などの

細胞周期調整遺伝子の発現の時間経過と発現部位を検討しました。またE2F1 decoy-oligonucleotide（ODN）投与下及び、E2F1-adenovirus投与下での腎機能の変化を検討しました。ARFラットではE2F1の発現は、12hから認められ、cyclinD1, E, Aはそれに遅れて24hで認められました。

E2F1 decoy-ODN投与によりcyclinD1, E, Aの発現は低下し、クレアチニン、BUNの回復も遅延しました。E2F1-adenovirus投与下では、E2F1は、近位尿細管に強制発現され、ARF後の腎機能の障害は、有意に軽減されました。培養尿細管細胞へE2F1及を強制発現させた時の細胞周期調整を検討したところ、cyclinD1, E, Aのpromoter活性及び蛋白発現は亢進し細胞増殖が認められ、E2F1 decoy-ODN投与では、promoter活性及び蛋白発現は低下しました。

以上の結果より、ARF回復期においてE2F1が発現することで細胞周期調整遺伝子が転写活性化され、尿細管細胞の増殖、再生及び腎機能の回復が引き起こすと考えられました。従って、ARFの予後の診断因子としてE2F1の発現が有用な指標と考えられました。またE2F1は、ARFの新規の治療のターゲットとなる可能性があります。これらの結果をもとに現在E2F1 knock outマウスでのin vivoの検討を行っており、今後上記のような新しい細胞内情報伝達系の解析と細胞周期調節遺伝子の遺伝子導入などを含めた新しいアプローチで腎疾患の診断、治療をめざしてゆきたいと考えております。これまでも医科歯科大学内の多くの研究室の先生方に、御相談に伺い、御指導を仰ぎましたが、今後とも宜しく御指導お願いいたします。

平成13年（1月～6月）学会賞等受賞者

広報委員会

所 属	職 名	氏 名	賞 の 名 称
医歯学総合研究科 口腔機能育成学	大学院生	リンスワノン ブッサヤラット	IADR Division Travel Award
医歯学総合研究科 う 蝕 制 御 学	医 員	北 迫 勇 一	IADR/Lion Dental Research Award
医歯学総合研究科 う 蝕 制 御 学	大学院生	ピソル セナウオン	Young Investigator Award (Quintessence Award)
医歯学総合研究科 摂食機能構築学	助 手	馬 場 一 美	Table Clinic Award
医歯学総合研究科 顎 顔 面 矯 正 学	助 手	須 田 直 人	東京医科歯科大学歯科同窓会研究者奨励賞
医歯学総合研究科 歯 周 病 学	助 手	青 木 章	T. H. Maiman Award
医歯学総合研究科 歯 周 病 学	医 員	岩 崎 剣 吾	IADR Travel Award
医歯学総合研究科 健 康 推 進 歯 学	大学院生	Khristine Marie G. Carinō	IADR/Lion Dental Research Award
医歯学総合研究科 医 療 経 済 学	教 授	川 渕 孝 一	社団法人日本医療法人協会創立50周年記念懸賞論文 優秀賞
教 養 部 化 学	助教授	奈 良 雅 之	第13回加藤記念国際交流助成
生体材料工学研究所 分 子 設 計	大学院生	大 吉 崇 文	ゴードンコンファレンス生物有機化学ポスター賞
生体材料工学研究所 制 御	助 手	木 村 昌由美	第6回睡眠学会研究奨励賞
生体材料工学研究所 生 体 シ ス テ ム " " " " 医歯学総合研究科 臓器置換学	助教授 教 授 助 手 教 授	中 村 真 人 高 谷 節 雄 大 内 克 洋 坂 本 徹	日本循環制御医学会齋藤賞
難治疾患研究所 分 子 病 態	教 授	木 村 彰 方	(財)平和中島財団 国際学術研究成果
難治疾患研究所 疫 学	助 手	横 山 徹 爾	日本脳卒中学会・日本心臓財団 草野賞

マックスプランク神経研究所での 在外研究を終えて

難治疾患研究所 神経疾患部門 神経病理学分野

助教授 黒岩俊彦

2000年8月より半年、ケルンのマックスプランク神経研究所を在外研究員として訪問しました。同研究所は虚血性脳血管障害が研究のテーマで臨床研究と動物実験の2つの部門で構成されています。私が訪問したのはホスマン教授の主宰する実験神経学部門でした。以前同研究所に留学したことがあったのですが、久しぶりで歩くケルンの街は大聖堂もその周りのホテルやレストランも、ライン川も停泊している遊覧船に至るまで変わらないたたずまいでした。

研究は血栓を頸動脈から頭蓋内に飛ばして脳梗塞と脳浮腫を作成して行うものでした。夏の陽射しの強いところに実験装置の手作りから始めて血栓の出来不出来に一喜一憂し、うまく目的の位置に血栓を飛ばし血栓溶解剤でうまく溶かすために試行錯誤するうちに秋が過ぎ、順調に実験が動き出したのは待降節の街の飾りが美しい頃でした。

今回の留学ではケルン大学とアーヘン大学の

大学生数名の研究指導をしました。写真1左はその一人アーヘン大学医学部の学生で脳神経外科が志望のクリストフです。学期間中も学外で研究実習ができる制度があり、その期間マックスプランク研究所に来ていました。なかなか感心な学生で、ケルンの冬は夜明けが遅いのですが早朝私が研究所につく時にはいつも一人で実験の準備を始めていました。アーヘンからケルンの研究所まで2時間半、学生には無料の各駅停車と路面電車を乗り継いで通い、携帯はもたずメールは大学と研究所のコンピュータを使うなどドイツの医学生生活はかなり質素な様子でした。写真1中央はブダペストの薬学出身で新顔のフランチェスカさんです。ハンガリー語はドイツ語とかなり異なり東西の障壁も依然あるそうですが、研究に来て早々からあまり支障なく研究所の人々とコミュニケーションしている様子を見ていますと、ヨーロッパは一つなのだなと実感しました。研究所には様々な国の研究者が

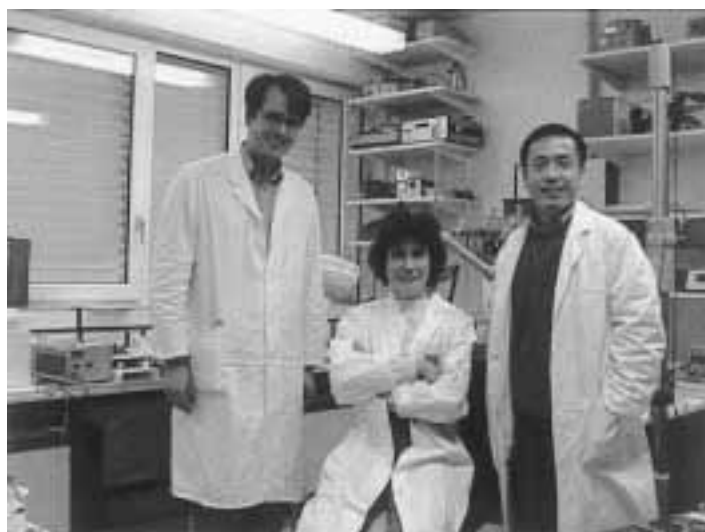


写真1 実験室の様子、左よりアーヘン大学医学部学生のクリストフ、ブダペスト出身の神経薬理学者のフランチェスカさん、そして筆者

来ていますが、ヨーロッパではハンガリーや北欧、アジアでは日本からが主で、英米の研究者はあまり多くないようでした。ジルベスターの花火でケルンの街の21世紀が開け、最後の1月は実験の仕上げにとってもあわただしい毎日でした。写真2は12月下旬にライン河畔の聖マルティン大教会で開催されたクリスマス合唱の夕べに当地の日本人の方々と参加した際の写真です。



写真2 ケルン聖マルティン大教会で開かれたクリスマス合唱の夕べの光景

国際協力の現場から JICA スリランカ国ペラデニア 大学歯学教育プロジェクト

大学院医歯学総合研究科 摂食機能構築学分野
助手 曾根田 兼 司



筆者は1999年に本誌上で JICA（国際協力事業団）スリランカ国ペラデニア大学歯学教育プロジェクトでの技術協力の様子を紹介しました。この度、同プロジェクトに2000年4月より1年間再度派遣されましたので、プロジェクトのその後の進捗状況について報告させていただきます。

1998年に始まったこのプロジェクトは、日本政府が発展途上国に対して行っている政府開発援助（ODA）の一つで、ペラデニア大学歯学部への教育、診療、研究の総合的な向上を目的に、5年間に58コースの技術指導が計画されています。現在200以上のさまざまなプロジェクトが全世界で進行中ですが、歯科に関係するのは他になく、このユニークなプロジェクトを

成功させるため、本学はこれまで延べ11名の職員を派遣しているほか、同歯学部と学術交流協定を結び、多くのスリランカ人留学生を受け入れています。

文化、習慣が違うこと、娯楽が少ないことなどから、とくに人間関係がぎすぎすしやすい途上国での生活ですが、プロジェクト開始以来3年間リーダーを務められた半田祐二郎 JICA 国際協力専門員の的確な指導で、他大学からの専門家も含めて、みな仲良く技術指導に専念することが出来ました。その結果、2000年11月に本学歯学部口腔顎顔面学部の田上順次教授を団員とする調査団を日本から迎え、プロジェクトの中間評価が行われましたが、陶材焼付冠、ブリッジ、金属床義歯などの鑄造修復、顕微鏡使用による口腔

海外レポート

再建外科手術，免疫組織学的口腔病理診断，解剖学など多くの分野で相当の技術が移転できているという高い評価を受けることが出来ました。

プロジェクトは2003年で終了しますが，残る2年でこれらの技術をさらに伸ばし，近隣諸国からの研修生を集める南アジアにおける研修センターとなるべくペラデニア大学と JICA は鋭意努力しています。開発援助の世界ではサステイナビリティ（持続性）という概念が重要です。日本の援助が引き上げたあとも向上したレベルが持続されてこそ，はじめてプロジェクトが真に成功したと言えるのです。ですから，研修費を集めることが出来るようになるのはプロジェクトのサステイナビリティにとって極めて重要な課題と言えるでしょう。ここでも本学はミャンマーのヤンゴン大学との仲介をしており，本年度中にはヤンゴン大学からの研修生を迎えていくつかの研修事業が始まる予定です，現在赴任中の口腔機能育成学の加藤純二先生はその準備で多忙とのことでした。

このように日本側がターゲットとして掲げた



補綴科での義歯製作の技術指導。早くから抜歯されることが多いため，レジン床義歯に対するニーズは高い。

目標はある程度達成できてきたものの，歯学部卒業生に就職口がないという何とも皮肉な問題が出てきました。スリランカの歯科医師の数は人口10万人あたり3.9人（日本は64.8人）とまだまだ不足しています。しかし，政府にはこれ以上公立病院の歯科医師を増やす予算はなく，また，一般開業医開業として経営が成り立つ場所も限られるため，200人以上がアルバイトしながら就職できるのを待っています。これは国家予算の30%強が軍事費に使われていることが

一因で，この国の長く続く民族紛争が1日も早く終結されることを切に希望し，ペンを置くことにします。



日本からの巡回調査の報告会。調査団の高い評価に高等教育省，保健省，大蔵省の各次官は大いに満足しつつも，提示されたいくつかの課題を真剣に受け止めたようであった。

バン格拉ディシュでの医療研修に参加して

大学院医歯学総合研究科 国際環境寄生虫病学

大学院生 林 栄 治



みなさんバン格拉ディシュにはどのようなイメージをお持ちでしょうか？洪水、最も貧しい国の一つなどマイナスのイメージでしょうか？観光資源も乏しいバン格拉ディシュには私達はなかなか行く機会がないのではないかと思います。今年2月、私は国際厚生事業団の主催による「新興・再興感染症専門家派遣研修」に参加し、一ヶ月間バングラディシュに滞在する機会をいただきました。

首都ダッカにあるInternational Center for Diarrheal Disease, Bangladesh (ICDDR, B)を中心に研修を行いました。現地では下痢病院と呼ばれている病院で、下痢であれば誰もが受診するといわれる病院です。ORS (oral rehydration solution)を開発し、その効果を証明した病院でもあります。特にバングラディシュは93年、O-139型コレラの流行があり、その後も従来のO-1型コレラの流行が続いています。この病院には多いときで1日に数百人の受診者があり、年間では10万人にも達するとのことでした。栄養不良を伴った小児も多く、さながら野戦病院といった雰囲気がありました。ここではとにかく費用のかかることはなるべくカットされるため、診断も全員培養などはせずdataをとるために数%無作為にpick upされた場合だけ行



ICDDR, B (通称、下痢病院)



コレラベッド (中央に穴があいており、下痢便はバケツにためられる。)

われていました。バングラディシュの人々はあちこちにある池で水浴もしますし、さすがに飲水用にはしませんが生活用水として洗濯や食器を洗ったりなどもします。さらに手で食事をする習慣もあるため、なかなか衛生状況はよくなりません。やっときちんと手を洗うことや生活

海外レポート

用水はサリーで濾過して使用することなど教育し始めているところでした。

このように生活習慣，気候，衛生状況などから感染症は避けられない問題です。ダッカは人口も多く感染症の天然の培養器といっても過言ではないと思われます。コレラ以外にも細菌性赤痢，チフス，アメーバなど多くの患者が来院しました。また，ダッカでは昨年8月，デング熱の流行があり50名ほどの死亡者もでています。

結核の専門病院も訪問しました。

病院は薄暗い感じで外来には患者がごったがえしていました。排菌している人もかなりいます。バングラディシュでは年間6万人が結核で亡くなっていると見積もられており，この状況に対して91年から National TB control program (NTP) をスタートさせていますが，これは2003年までの目標で1. スメア陽性患者の70%を見つける。2. 新たにスメア陽性と判明した患者の85%を治癒させることとなっています。現在のところまだ発見率は30%程度といわれています。この病院ではきちんと胸のレントゲンを撮り，痰の塗沫・培養検査を施行し，治療にはDOTsを行っています。しかし再発や空洞形成の患者も多く認めました。

またこの国の大きな問題として母子保健の問題があります。女性は10代半ばから後半で結婚することが多く，母体の低栄養や感染などもあって郊外では約40%が低出生体重児といわれています。さらに母親の母乳の与え方などの知識が十分でなく，マラスムスやクワシオコワといった栄養失調がまれではありません。そこにさらに下痢症が追い打ちをかけるかたちとなります。病院ではまず母親に母乳の与え方を教育



生活用水はサリーでろ過

し，さらに離乳食の作り方を指導していました。十分な栄養を補給し体重も増えたところで退院とし，その後も継続して定期的にフォローしていました。

小児科の総合病院 (Dhaka Shishu Hospital) にも訪問しました。こちらには日本から JICA の派遣で看護婦さんが来ていました。345床の大きな病院で医療費のかからない free bed と，医療費のかかる paying bed に分けられているとのことでした。ICU も備えており検査室も充実していました。ダッカは大気汚染がひどく喘息が増えていることもあり，一番大きな問題は呼吸器感染症で治療の中心は Chloramphenicol もしくは Ampicillin+Gentamycin でした。

バングラディシュの人々はとても話し好きで，とにかく明るく友好的です。川から見る沈む夕日はとても美しく幻想的ですからあります。政党間の対立によるゼネスト，急速に近代化を進めるばかりに大気汚染など多くの問題もありますが，今後はよりよい方向に発展していくことを願ってやみません。本学にも留学生の方達が勉学に励まれており，今後も日本との友好がさらに深まっていくことを切に望みます。

受験生のための大学説明会

入学者選抜広報の一環として「受験生のための大学説明会」が、平成13年7月30日（月）約620名の参加者のもと開催されました。

医学，看護学，検査技術学，歯学を志す高校3年生を対象に，本学の教育理念を示し，また，受験生の進路選択において，本学の教育内容等について十分理解を得られるようにすることを趣旨としたものです。

全体説明会では，初めに廣川医歯学総合研究科長から挨拶があり，佐藤副学長の「入学者選抜及び学生生活」についての説明後，吉田助教授（教養部），高谷教授（生体材料工学研究所），平岡教授（難治疾患研究所）から教養部及び研究所の説明が行われました。

全体説明会終了後，引き続き，一部会場を移動して各学科・専攻別の説明会が開催されました。

医学科は麻生教授，看護学専攻は松岡教授，井上教授，検査技術学専攻は神山教授，窪田助教授，歯学科は俣木教授からそれぞれ説明が行われました。

参加者からのアンケートの集計の結果，多数から大変参考になった旨の回答がありました。

- ① 開会挨拶
- ② 医歯学総合研究科長挨拶
- ③ 大学広報ビデオの放映
- ④ 入学者選抜及び学生生活説明
- ⑤ 教養部説明
- ⑥ 生体材料工学研究所説明
- ⑦ 難治疾患研究所説明
- ⑧ 各学科・専攻別に各室に分れて説明
- ⑨ 質疑応答
- ⑩ 閉会挨拶



廣川医歯学総合研究科長の挨拶



5号館講堂を埋めた大勢の受験予定者たち

目 次

- 受験生のための大学説明会 34
- 平成14年度入学者選抜 35
- 2001年 日本留学フェアに参加して 36
- NAFSA 大学間交流促進プログラム
年次総会に参加して 37
- 妙高高原赤倉寮の冬季利用について 40
- 課外活動における事故防止 41
- 交通事故の防止 41
- 第50回お茶の水祭，開催!! 42
- サークル紹介 45

平成14年度入学者選抜

本学の「平成14年度入学者選抜に関する要項」を7月16日（月）に公表しました。

主な内容は、「分離・分割方式（前期・後期日程試験）による一般選抜」及び特別選抜である「推薦選抜（医学部保健衛生学科看護学専攻のみ実施）」、「私費外国人留学生特別選抜」の試験に関する概略をまとめたものです。

今後入学試験については、全教職員のご協力のもとに実施していくことになりますのでこの紙面をお借りしてご協力方よろしくお願い申し上げます。

大学入試センター試験及び本学の個別学力検査等の実施日程は次のとおりです。

1. 各試験の実施日程（実施場所）

① 3年次編入学試験（湯島地区）

出願期間

平成13年8月17日（金）～8月23日（木）

学力試験

平成13年9月20日（木）

面接

平成13年9月21日（金）

② 推薦入学の特別選抜（湯島地区）

出願期間

平成13年11月1日（木）～11月7日（水）

第1次（書類）選考発表

平成13年11月15日（木）

第2次選考（小論文、面接の実施）

平成13年11月26日（月）

③ 大学入試センター試験（代々木ゼミ）

平成14年1月19日（土）～20日（日）

④ 本学個別・出願期間

平成14年1月28日（月）～2月6日（水）

⑤ 本学個別・前期日程試験

（代々木ゼミ・湯島地区）

平成14年2月25日（月）～27日（水）

⑥ 本学個別・後期日程試験（湯島地区）

平成14年3月12日（火）～13日（水）

⑦ 私費外国人留学生特別選抜

学力検査（代々木ゼミ）

平成14年2月25日（月）

面接（湯島地区）

平成14年3月12日（火）

2. 試験教科・科目等、その他詳細については、入学主幹付入学試験掛へ照会願います。



2001年 日本留学フェアに参加して

留学生センター 教授 都 河 明 子

平成13年6月29日（金）、30日（土）の2日間、マレーシアのクアラルンプールで開催された「日本留学フェア」に学生課横田耕一専門員と私が参加いたしました。

「日本留学フェア」はマレーシアの学生が留学希望に合った大学コースを選択し、実りある留学を達成できるよう、我が国の高等教育に関する情報及び個々の大学の教育、研究上の特色等に関する最新で的確な情報を提供し、我が国への留学の促進を図るために開催されます。

（財）日本国際教育協会とマレーシア元留日学生協会の主催、在マレーシア日本国大使館及びマレーシア東方政策同窓会後援で開催されたこのフェアには日本の22国立大学、22私立大学の他に、今回初めて、文部科学省指定「大学入学のための準備教育課程」を持つ日本語教育機関等が参加しました。従来、一流ホテルを会場として利用していたのですが、今回は貿易センターのイベントホールを会場としたため、入場しやすい雰囲気と会場内の他のイベントとの相乗効果のためか、2日間で昨年の入場者数に比べて3,000名多い5,264名が参加し、広い会場は終日賑わっていました。

東京医科歯科大学には平成13年5月現在、



中国系の高校の制服はブラウスとスカート
（手前左：通訳、右：横田氏）



マレー系の高校の制服は民族衣装
（左：通訳、右：都河）

39ヶ国・地域より208名の留学生在籍しています。その内マレーシアからの留學生は11名で全体の5%を占めます。本学の江藤一洋副学長が東方政策に深く関与されておられるため、当ブースには学生だけでなくマラヤ大学の日本人教師団や日本留学プログラム担当者等が訪問され、第一日目は83名、第二日目は100名の総勢183名が本学に興味を持って来場されました。マレーシアには大学が少ないためか、訪れた大学生は比較的少なく大半が高校生で中には中学生もかなりいました。教育熱心な父親、母親同伴で真剣に留学を考えている学生たちもあり、長い間話し込んでおりました。また、2日間とも学校単位で進学指導の先生に引率されて来場する者の多く、中には貸切バスで7時間かけ、半島の反対側から参加した学生もいました。

東南アジア諸国のなかでは、経済危機をのりこえ、順調に高度成長をとげているマレーシアは、新しくできた国際空港や市内に通じている高速道路、またバスから見える町並みも緑が多く手入れもいきとどきとてもきれいでした。最近、海外からの留學生受入れを推進し始めたようですが、まだまだ日本との経済格差があるようで、相談内容には専門分野や本学への入学方法のほかに、学費、生活費、奨学金に関する質

学生ニュース

間が多く、在マレーシア日本大使館のブースに行って大使館推薦の国費留学生について尋ねるよう学生に指示したため、日本大使館のブースには特に来場者が殺到していました。大学独自の奨学金制度を持つ大学が少ないため他大学でも同様の指示を出されていたようです。

出発する前に8頁ほどの英文リーフレットを作成して持参しました。準備した数以上の多くの来訪者を得たため、有料コピーを沢山しなくてはならず、次回からはなるべく多くの資料を用意する必要性を感じました。さらに、このリーフレットには東京医科歯科大学の機構・教

職員や学生数・入学案内・Teaching staff list を掲載しています。中・高校生に対してはこれで十分であると思いましたが、大学院博士課程に入学希望する者にとって海外で指導教官を探すことは大変で、詳しい英文研究室案内が必要であると痛感しました。180余名のうち本学に留学できる学生は何人いるかわかりませんが、各国で開催される留学フェアに参加し、的確な情報を与え、本学への入学を奨めることは研究上、教育上での本学の国際化に一役を担うことと思います。このような良い機会を与えて下さった関係各位に御礼申し上げます。

NAFSA 大学間交流促進プログラム年次総会に参加して

留学生センター 教授 ^{やま} ^{した} ^{さよこ} 山下 早代子

はじめに

平成13年5月27日より6月1日まで、米国の建国^{ゆかり}緑の地フィラデルフィア（ペンシルベニア州）で第53回 NAFSA 年次総会が開催されました。初めての参加となる本学からは、大学院医歯学総合研究科の赤尾信明講師（留学生専門教官）、佐藤まき子留学生課専門職員、それに筆者留学生センター教授山下早代子が参加しました。会期中の参加者総数は約5,200名、そのうち1,300名が外国からの参加ということで、地域もアジア、ヨーロッパ（北欧、東欧、イベリア半島など）、豪州、アフリカ、中近東、南米と、世界の殆どの地域から代表がやってきて大変賑わいました。

NAFSA とは

NAFSA [ナフサ] とは本来 National Association of Foreign Student Advisors の略だそうですが、設立当時の目的である狭義の留学生アドバイザーの協議会から、国際間の大学交流促進のための学会として大きく飛躍したので、



「日本留学フェア」ブース

現在は、NAFSA の部分はそのまま残し、NAFSA Association of International Educators と呼ばれるようになりました。会期中は、国際間の大学間交流、留学生教育などを中心にさまざまなワークショップ、研究発表、それにエクジビション等が行われました。会員・参加者は政府機関の国際教育を担当している人、大学の国際センターや留学生センターなどの留学生業務を担当している教職員、研究者、そして外国語教育の専門家等が中心で、総会組織委員の殆どは大学関係者です。

総会で議論されるテーマ

総会で議論されるテーマは国際交流に関する様々なことからです。期間中のワークショップ、個別発表のテーマを見てみますと、「機関をどのように国際化させたいか」「留学相談業務のストラテジー」「留学生の奨学金等の資金の調達法」「テクノロジーと海外留学」などのトピックが目白押しです。展示場の参加団体を見ますと、海外留学プログラム関係約100、英語教育29、国際支援団体（フルブライト、ロータリーなど）30、外国の大学機関67（ただし本学の参加した日本教育協会の日本大学留学フェアは個別の大学として数えませんので、この中に本学は含まれません）、アメリカの大学31、アメリカ政府省庁（教育や移民局など）4、その他、大使館、出版社などがこれに続き、国際交流あるいは留学生教育に大いなる関心を持つ機関が多数参加していることがわかります。

本学の参加意義

留学生数が200名を超える本学（特に大学院レベルだけを考えれば、学生のうち10人に1人が留学生であり、その数の多さに驚きます）では、異なった文化圏から来た留学生に対して、こまごまとした手続き上のことはもとより、異文化対応や精神上的のケアも大切な業務になっていますので、そういったもろもろのことに关して、専門部会で情報交換することができるNAFSAへの参加は意義のあることです。

また同時に、国際化、開かれた大学を目指す本学にとっては留学だけでなく日本人学生に対しても、国際的視野を持った医療人に育てるために何が可能かということも考えていかなければなりません。NAFSAはそういった点でも海外の専門家の最新の意見を聞き、情報交換のできる場として有効です。このような場に積極的に関わっていくことにより本学の国際教育に関するノウハウも深まります。

日本からの参加団体

財団法人日本国際教育協会が取り纏め役になって構成された「日本留学フェア」ブースには、会期中、本学を含む日本からの22大学（うち国立大は東大、九州大など11校、私大は慶応大、中央大、国際基督教大など11校）が参加し、ブースを共同使用しながら、日本の教育に関する情報の提供、国際交流推進のための大学間交流締結についての相談、また世界の他機関の教育に関する情報の収集に努めました。この他にいくつかの私立大（早稲田大、立命館大、南山大等）は独自にブースを持ち、主に留学生の募集に力を入れているようでした。

「留学フェア」といえば、通常はこれから日本に留学したいと希望する学生を対象に行われ、日本留学相談が中心ですが、このNAFSAでの「留学フェア」は学生の参加（入場）がないこともあり、個別の留学相談は皆無です。そのかわりに、提携の可能性を打診する機関や、語



NAFSA 会場



展示場入口

学プログラムの学生を募集している団体などがブースにやってきますし、またこちらからも他機関のブースへ情報を集めにいく、といった活動を積極的に行いました。

総会参加の収穫

本学の参加は初めてであったので、何事にも新しく知ることが多かったのですが、

1. 国内、国外の各大学が情報網の構築に努力していることを知ったこと
2. アメリカだけでなく、欧州各地、アジア、中近東、南米、等の留学情報が入手できたこと
3. 提携の打診がいくつかあったこと（ボランティア派遣の要請なども含む）

などが収穫として報告できます。特に2の点は、これから海外に出ていく予定の本学大学関係者、研究者、学生などに対して、情報を提供することにより留学生センターが側面から関係者の研究をサポートできるような体制が作れるのではないかと考えています。

今後に向けて

本学が国際化を推進するにあたっては、外に向けて正確で、適切な量の情報を、常にアップ



年次総会会場

デートしながら供給していく必要があります。日本国際教育協会ブースの、本学以外の大学がカラフルな大学案内を2～3種用意して情報提供にやっきになっていたのに対して、本学の活字のみの地味な案内はそれだけで人の注意を引くのは容易ではありません。よい学生を集め、よい大学間交流を促進していくためには現在開発中の英語ホームページなども含めて、今後はいっと積極的に広報活動を行っていく必要があるように思います。

最後に、今回の NAFSA 年次総会参加に際し、関係各位には大いにお世話になりました。この場をお借りして御礼を申し上げたいと思います。



妙高高原赤倉寮の冬季利用について

1. 利用の申し込み

妙高高原赤倉寮の使用は、原則として使用日の1か月前から受付け、7日前に締め切りますが、下記の期間は特に混雑しますので、予約申込みの人数が定員を上回る場合は、抽選により予約順位を決定します。

なお、抽選取扱期間でも抽選日の翌日以降、空室があれば通常の手続で受付します。

2. 予約利用期間

予 約 抽 選 該 当 期 間	申込み締切日	抽 選 日 時
13.12.22（土）～14. 1. 7（月）	13.11.27（火）	13.11.30（金）12:00

3. 利用にあたって

できる限り多くの方に利用していただくため、宿泊数は、教職員・学生共に3泊4日以内とし、申込み人数は、最大15名程度、2部屋までとします。

食事の利用は、スキーシーズン中全期間にわたり、利用開始日の夕食から、利用終了日の朝食までとします。

車で行かれる場合、危険防止のため寮駐車場の利用ができないことがあります。赤倉駐車場（町営1泊500円）の利用を予定してください。

4. 申込み場所

厚生課厚生保健掛（教養部厚生掛でも可）

5. 抽選について

抽選場所 厚生課（1号館1階）

抽選を行う場合は、抽選日の前日までに連絡しますので、抽選には必ず参加願います。

（都合の悪い場合は、代理でも可）

6. その他

1. 使用は本学関係者に限ります。

2. 赤倉寮への夜半・早朝の到着は他の迷惑となるので受付できません。

厚生課

課外活動における事故防止

学生諸君の課外活動は、各自の責任と自主的な判断のもとに、原則として学生自らの負担において行われるものですが、関係行事の実施及び計画の立案に当たっては、日頃の練習活動のほか、使用する施設や気象条件等を十分に調べて安全の確保に務めるなど、危険防止に万全を期してください。また、次の留意事項を必ず守ってください。

◇留意事項◇

1. 行事の実施計画及び届出等について

事前に顧問教官に届け出るとともに、合宿届又は遠征届を学生課学生掛へ提出すること。

特に「山岳部」と「ワンダーフォーゲル部」については、合宿の詳細な行程、装備内容、緊急連絡先等を記した『山行計画書』を併せて提出すること。

2. 健康診断の実施

大学で毎年実施する健康診断は、必ず受診すること。

体力の消耗が激しいスポーツ大会・行事等への参加に当たっては、学生課学生掛を通じて、保健管理センターにおける健康相談を申し出ること。

3. 緊急対策

必要に応じ、警察署（交番）、消防署、役場等への届出を行うこと。

また、緊急時における連絡先を、顧問教官、学生課、関係OB宅、部員宅等へ明確に伝えておくこと。

4. 交通事故の防止

行事（大会）への参加に際し、自動車等の使用が増えているため、ゆとりのある計画を立てるとともに、交通規則を守り、事故の防止に努めること。

5. スポーツ安全保険等への加入

サークル部員が安心して活動するためにも、スポーツ安全保険等に参加すること。

6. 講習会等への積極的参加

学内、学外での各種安全講習会等に積極的に参加し、専門的な知識・技術を修得すること。

7. 事故が発生した場合の対応

万一事故が発生した場合には、人命救助を第一に適切な対応をするとともに顧問教官、学生課等へ連絡し、必要な指導を受けること。

なお、帰学後、速やかに「事故報告書」を学生課学生掛へ提出すること。

交通事故の防止

学生による交通事故が毎年のように発生しています。

交通事故は、被害者になっても、加害者になっても、痛ましい結果を生みます。

「危険」は、いつも皆さんのすぐ隣にいます。交通ルールを守ることにより、安全運転には十分注意してください。

特に、自動二輪車の運転には注意してください。

《交通ルールとマナーの実践》

1. 安全速度を必ず守る。

2. カーブの手前ではスピードを落とす。

3. 交差点では必ず安全を確かめる。

4. 一時停止で横断歩行者の安全を守る。

5. 飲酒運転は絶対にしないこと。

6. シートベルトを締める。

以上の「安全六原則」を守ろう。

第50回お茶の水祭，開催!!



お茶の水祭実行委員長
 ふじ おか まさ し
 藤 岡 正 志 (M4)

この度第50回お茶の水祭実行委員長を務めさせていただきます，藤岡と申します。2001年度のお茶の水祭は10月20日（土），21日（日）の2日間開催されることとなりましたので報告いたします。併せて，委員会役員が次のように決定しましたので記させていただきます。

お茶の水祭は，本学関係者の皆様の大きな支えを受けてこれまで成功を重ねることができました。深く御礼申し上げます。今年度も，皆様のご指導とご厚意を賜りたくお願い申し上げます。

さて，今年度のお茶の水祭テーマは『新世紀医歯ん』となりました。これは，小泉総理大臣の「新世紀維新」をもじったものですが，総理の日本を変えようという思いに，21世紀初にして，50回目という節目にお茶の水祭を変えていこうという我々の思いを重ね合わせたものでもあります。いい伝統は引き継ぎつつ，新しいことにも取り組み準備を重ねております。今年の特色は，新たにフリーマーケットを始めること，大学側に先駆け，一橋大学，東京工業大学，東京外国語大学とともに四大学連合の連携の強化が挙げられます。

本学関係者の皆様も是非お茶の水祭に足を運んで頂き，私たちの成果を共に分かち合っていたきたいと考えております。皆様のお力添えをよろしくお願い申し上げます。

第50回お茶の水祭実行委員会役員

実行委員長	パンフレット
藤岡 正志 (M4)	久保浩一郎 (M4)
副委員長	稲吉康比呂 (M4)
戸次 悠貴 (D4)	横井 優磨 (M4)
会計	ポスター
内山 英俊 (M4)	堀内和一郎 (M4)
会場	本部企画
木村 晶理 (M4)	鈴木 道隆 (M4)
資材	伊藤 浩光 (M4)
石井 洋介 (M4)	米倉 孝治 (M4)
小幡 佳輝 (M4)	村川美也子 (M4)
食材	横溝 美緒 (M4)
伊藤 将也 (M4)	滝島 茂 (M4)
渉外	端本 宇志 (M4)
長岡 武彦 (M4)	平田 真一 (M4)
玉置 若巳 (M4)	鳥井原 彰 (M4)
西田 秀範 (M4)	樽井 俊 (M4)
講演会	清水 寛路 (M4)
木原 淳 (M4)	五十嵐 英 (D4)
公開模擬	犬飼 美香 (D4)
小川 絵里 (M4)	黒田 直子 (D4)
古謝 志麻 (M4)	佐々野友貴 (D4)
千葉佐保子 (M4)	土井 聡子 (D4)
対外交流	瀬戸 麻子 (D4)
小泉 伸也 (M4)	八木 優子 (D4)
杉山 知代 (M4)	中夜祭
バザー	清川 佑介 (M4)
早川 恵理 (M4)	佐藤 公太 (M4)
原田江里子 (M4)	後夜祭
松本 暁子 (M4)	的場 弘将 (D4)
山本紗也香 (M4)	美術
広報	太田 浄文 (M4)
鈴木 道隆 (M4)	高木 俊輔 (M4)

第50回お茶の水祭 講演会

今回の講演会では「生きること」を改めて考えられる場を作る、という方向性で行いたいと考えています。担当者が先生にお送りした手紙の中に、次のようなことを記しました。

「この講演会にて最も大切にしたいのは、生きるということに対して真摯に向き合った時に、どのような思いがあり、どのような行動をするのか、そしてどのような行動に出なければならないのか、ということなのです。」

御講演をいただく先生方はお二人とも第一線の医師でいらっしゃると共に、患者さんに対して、また医学・医療の抱える問題に対して、真正面から向き合っておられる方々です。

講演 1

講師：須磨久善先生（葉山ハートセンター名誉院長）

日時：2001年10月20日（土）13時より

須磨先生は、世界的な心臓血管外科医です。今年1月16日にNHK「プロジェクト X」にて日本初のバチスタ手術（拡張型心筋症という病気に対して、心臓・心筋の一部を切り取るという手術）を行った医師として、患者と向き合う先生の姿が放映されました。また、次代の育成にも病院見学という形で取り組まれています。

先生が守り続けているもの、そして医師のあるべき姿をお話ししてくださるでしょう。

講演 2

講師：近藤 誠先生（慶應義塾大学医学部放射線科学教室講師）

日時：2001年10月20日（土）15時30分より

近藤先生は「患者よ、がんと闘うな」などの著書で知られる医師です。私たち医療の世界に浸っている者が盲目的に信じたり行っていたりすることを、先生はその問題点を分かりやすく明確に論じられます。しかし、先生が様々な問題点を論じるのは、医療の原点として患者さんの存在があるからこそなのだと思います。

今の医療に内在する問題を解決するための糸口が、きっと見つかることでしょう。

（会場は、両講演とも5号館4階講堂。都合により日時、会場は変更の可能性があります）

多くの皆様の御来場を、心よりお待ちしております。第50回という記念すべきお茶の水祭で、もう一度、医療・医学の本質を考えてみましょう。

お問い合わせ・御要望は、講演会担当の木原（M4）まで（kihara-tmd@umin.ac.jp）、または5号館3階のお茶の水祭実行委員会室前のポストまでお願い致します。

お茶の水祭 **チャリティーバザー****&フリーマーケットのお知らせ**

毎年恒例のチャリティーバザーも今年で9年目を迎えました。

今年はなんと初企画フリーマーケットも行われます！！

毎年多くの方にその主旨を理解していただき、昨年は収益金を障害者施設「かもめ工房」に寄付することができました。今年も売り上げ+フリマ参加費を福祉施設に寄付する予定です。



ただ今

バザー出店品募集！！

フリマ参加団体募集！！！！



生物以外なら何でも受け付けます☆

酒 (毎年よく売れます。封が開いていないものならなんでもよいです。)

電化製品 (充分使用できるかご確認下さい)

古着 (あらかじめ洗濯をお願いします。)

スーツ (ハンガーにかけていただくと助かります。)

など、数多くの御出品を期待しています！！



《連絡方法》

直接持参する場合…………お茶ノ水祭本部または学友会室(5号館3階)

取りに来てもらう場合…お近くのお茶祭実行委員(M4orD4)にお申し付け下さい。

または、学友会室 03-3813-6111(内線 7063)

お茶祭電話 090-6148-6577 にご連絡下さい。

バザー&フリーマーケット担当 早川(M4)・原田(M4)・松本(M4)・山本(M4)

サークル紹介

■ バドミントン部 ■



バドミントン部のモットーは、「たのしい部活動」です。春と秋の大会シーズン以外は、色々なイベントを企画して部を盛り上げています。飲み会はもちろんのこと、お花見、ボーリング大会、花火大会・焼き肉ツアー、スキー合宿など数えあげればキリがないほどのです。このようなイベントを通して先輩・後輩の絆が深まっていくのです。

さらに、昨年からホームページがスタートしました。活動紹介や部員紹介な

ど写真つきで掲載されており、随時アップされています。本学のホームページから入れますので、ぜひ一度のぞいてみて下さいね。

以上、バド部の仲の良さについて書いてきましたが、このような団結力は部員一人一人のバドミントンに対する情熱と向上心から生まれるものです。皆が同じ目標に向かってがんばることで、一人ではできなかったこともできるようになります。大学生活に疲れてしまったときは、アツいバドミントン部にお越し下さいませ！

(M3 ^{よしのときこ} 吉野富紀子)

■ 茶 道 部 ■

茶道部員は、それはそれは楽しそうに遊んでいます。夏合宿など、箱根に温泉につかりに行くのが目的のようなものです。しかし、よくみると茶道をやっていることもあるようなのです!!!でもや

はり、他大学のお茶会に行くことで友達を増やし、結局は遊んでいるのでしょ。

「茶道のおもてなしの精神は、医療にたずさわる者の思いやりの心につながる」

By 部長 風間裕貴

(M3 ^{からかまじゅん} 唐鎌 淳)



■ ソフトテニス部 ■

ソフトテニス部は、男女合わせて現在約50名の部員がいます。今春、男子は関東医歯薬リーグの団体戦で1部優勝を飾るなど好成績をおさめ、女子も男子にまけじと健闘をみせました。その他、東医体やオールデンタルなどでも毎年活躍していますが、それより何よりうちの部の人達はみんなテニスが好きです。

そんなの当たり前だといわれてしまいそうですが、練習の合間や終わった後など暇さえあればみんなコートで打ったり試合をしたりして楽しんでいます。ソフトテニスを楽しみたい方は、コートへ気軽に来てください。



(M3 やの たかし
矢野 尚)

■ お茶の水管弦楽団 ■

去る5/12(土)、お茶管の第68回定期演奏会が池袋にある東京芸術劇場の大ホールで行われました。芸劇みたいな大ホールでの演奏なんてなかなか経験できないので、約2000人収容のホールに開演前に人がどんどん入ってくるのを見た時は、嬉しくもあり、ちょっとびびったりもしました。約1500人のお客様の前で、我々なりに最善の演奏を尽くした…と思います。次はウィーンからソリストを呼んでドボルザークのチェロ協奏曲をやります。必見ですよ。

(M3 よこい ゆうま
横井優磨)



コンタクトレンズの 選び方と使い方

インタビュー

谷 哲 (保健管理センター所長)

最近では、女性ばかりでなく男性でも、眼鏡を使わずコンタクトレンズを使っている人が多くなっています。また保健管理センターにくる人の中には、コンタクトレンズをつけていて、眼が赤くなって痛いとか、涙が出て困るといってくる人が増えています。このまま放置すると、眼に回復困難な障害を残すこともあると聞いています。そこで今回は視覚応答調節学分野の教授であり眼科学担当の望月學先生に、コンタクトレンズの選び方と使い方についてうかがいました。



望月 學 教授

大学院医歯学総合研究科
システム神経医学講座
視覚応答調節学分野

コンタクトレンズ (CL) には、ハード CL とソフト CL の2種類があります。ハード CL は細菌等の微生物に汚染されることが少なく、酸素透過性も非常に高くすることができます。そういう意味では安全なレンズといえるでしょう。ただ装用感がやや劣ると言われ、「どうしても使えない」という患者さんも時にあります。これは角膜形状とレンズ内面曲面のフィッティングが適切でない場合が多いので、適切なレンズの選択と処方が必要です。特別な疾患がない限

健

康

コ

ラ

ム



このコーナーを担当
していただく
保健管理センター所長
谷 哲 教授

り、殆どすべての人にハード CL の装用は可能です。

これに対してソフト CL は装用感が良く、激しい運動をしてもズレたり脱落しないことがメリットです。ただし、酸素透過性が十分でないことやタンパク質や脂質の沈着物 (デポジット) が付きやすく、これが引き金となって環境由来デポジット (花粉など) や微生物デポジットが生じると、重い感染症やアレルギー疾患を引き起こすことがあるので注意が必要です。最近では、このようなソフト CL の弱点を補うディスポーザブル CL が登場してきました。1 日用、1 週間用、ケアをしながら 2 週間を使い捨てていくタイプがあります。このうち連続装用の 1 週間用 CL は瞼を閉じている夜間に酸素の供給が少なくなって角膜の障害を起こすことがあります。できれば 1 日または 2 週間用の終日装用レンズをお勧めします。

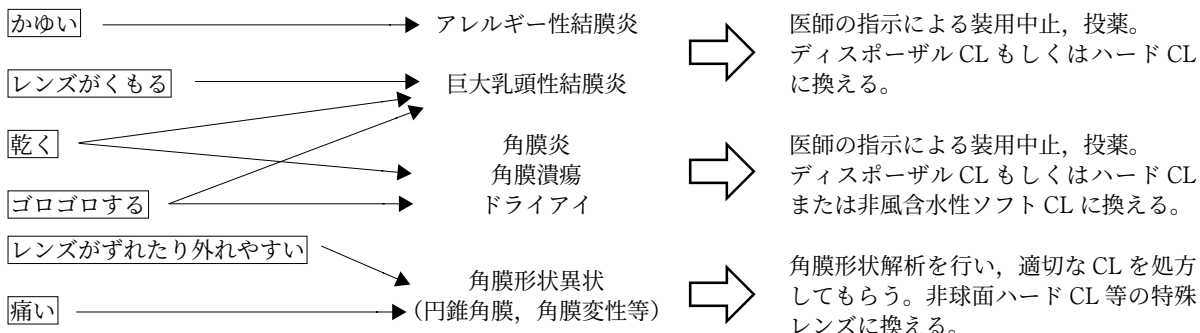
ところで、CL が適切に処方されていても、ケア (消毒) がキチンとできなければトラブルの原因になります。最近では「つけておくだけで OK」といった簡単なケア用品がさかんにコマーシャルされています。しかし、キチンとこすり洗いをしないと前述したレンズ表面のデポジットは落ちてくれません。きれいな指でこすり洗いを心がけてください。

CL 使用中の皆さん、3 ヶ月に一度は専門医の定期検査を受けましょう。CL を装用して「かゆい」「痛い」といった自覚症状を感じたり、「レンズがくもる」「ずれる」「はずれやすい」などの症状は、“危険”信号です。こういった症状がある場合、レンズが目に合わせていないばかりか、目の病気が隠れていることも少なくありません (図)。我慢できなくなると、ようやく眼科を受診することはしないでください。なるべく早目に眼科を受診しましょう。

症 状

隠れている可能性のある眼の病気

解決法



行事案内

(集会名等：日時／講師
名(所属)／演題等／場
所／連絡先)

平成13年度東京医科歯科大学

公開講座

「健康を守る(Ⅱ)」—ストレス社会における健康—

プログラム

第1回

10月3日(水)
18:00~19:40

漢方で上手に痩せよう

医学部非常勤講師
東京海上メディカルサービス(株) 医療本部長
新宿海上ビル診療所理事長

西元 慶治 講師

第5回

11月14日(水)
18:00~19:40

歯科インプラント治療について

大学院医歯学総合研究科摂食機能制御学分野
春日井昇平 教授

第2回

10月10日(水)
18:00~19:40

アトピー性皮膚炎について

大学院医歯学総合研究科環境皮膚免疫学分野
横関 博雄 助教授

第6回

11月21日(水)
18:00~19:40

ストレスと病気

—頭頸部領域のストレス疾患について—

大学院医歯学総合研究科口腔心身医学分野
小野 繁 教授

第3回

10月17日(水)
18:00~19:40

精神障害者による犯罪と被害者

—その実態と、社会的対応のありかたをめぐって—

難治疾患研究所犯罪精神医学分野
山上 皓 教授

第4回

10月31日(水)
18:00~19:40

現代人の眼

大学院医歯学総合研究科視覚応答調節学分野
望月 學 教授

■場 所：東京医科歯科大学 歯学部特別講堂（歯科外来事務棟4階）

■募集人員：100人（応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。）

■応募方法：官製はがきに住所、氏名、年齢、電話番号、「健康を守る(Ⅱ)」受講希望と記載して下記宛お申し込みください。

〒113-8510 東京都文京区湯島1-5-45

東京医科歯科大学 総務部研究協力課研究協力第二掛

Tel 03-5803-5872 (ダイヤルイン)

受講者決定後、受講料お支払いの案内をお送りします。

■締 切 日：平成13年9月20日(木) 消印有効

■受 講 料：6,800円(全6回分)

郵便為替、現金書留、または現金持参にてお支払い願います。

■そ の 他：受講者には、開講日初日に領収書、受講証及びテキストをお渡しします。全6回のうち、4回以上受講の方には修了証を授与します。

行事案内・掲示板 原稿募集

原稿や写真（表紙含む。主に本学を題材にしたもの。）を募集しています。

行事案内・掲示板の欄は職員、学生、皆さんのページです。研究会、講演会、セミナー、特別講義、サークルの行事などの開催案内、その他にご利用下さい。

なお、本欄掲載事項に関する照会等への対応は、利用者の責任において行なって下さい。

行事案内は、集会名等：日時／講師（所属）／演題等／場所／連絡先（所属・氏名・電話内線番号等）の要領で、その他の掲示板は原則として100字程度でお願いします。

原稿は広報委員あるいは総務課(1号館2階 内線4530, Eメール hiroba@tmd.ac.jp (Information, Topicsを明記))までお願いします。

発行予定日は3, 6, 9, 12月です。該当月の1ヶ月前までにお届け下さい。

広報委員会委員

一條秀憲（歯学部）
大谷啓一（歯学部）
岡部繁男（医学部：委員長）
渡橋正博（事務局長）
北嶋繁孝（難治疾患研究所）
松岡 恵（医学部）
水野哲也（教養部）
宮入裕夫（生体材料工学研究所）
事務担当 総務部総務課

医歯大ひろば No. 84

編集 東京医科歯科大学広報委員会
発行 東京医科歯科大学総務部総務課
〒113-8510
東京都文京区湯島1-5-45
Tel 03(5803)4530
Fax 03(5803)0273

■ 本学ホームページアドレス <http://www.tmd.ac.jp> ■
■ 広報委員会、医歯大ひろばに関する投稿、ご意見、セミナー等開催のご案内は
メールアドレス hiroba@tmd.ac.jp ■



本紙は再生紙を使用しています。



スポーツ公開講座



夏休み子供自然科学公開講座

教養部において公開講座を開催しました。

(関連行事 本文19ページ)